

洗 島 遺 跡 洗 島 1 号 墳

－牛川西部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2008年3月

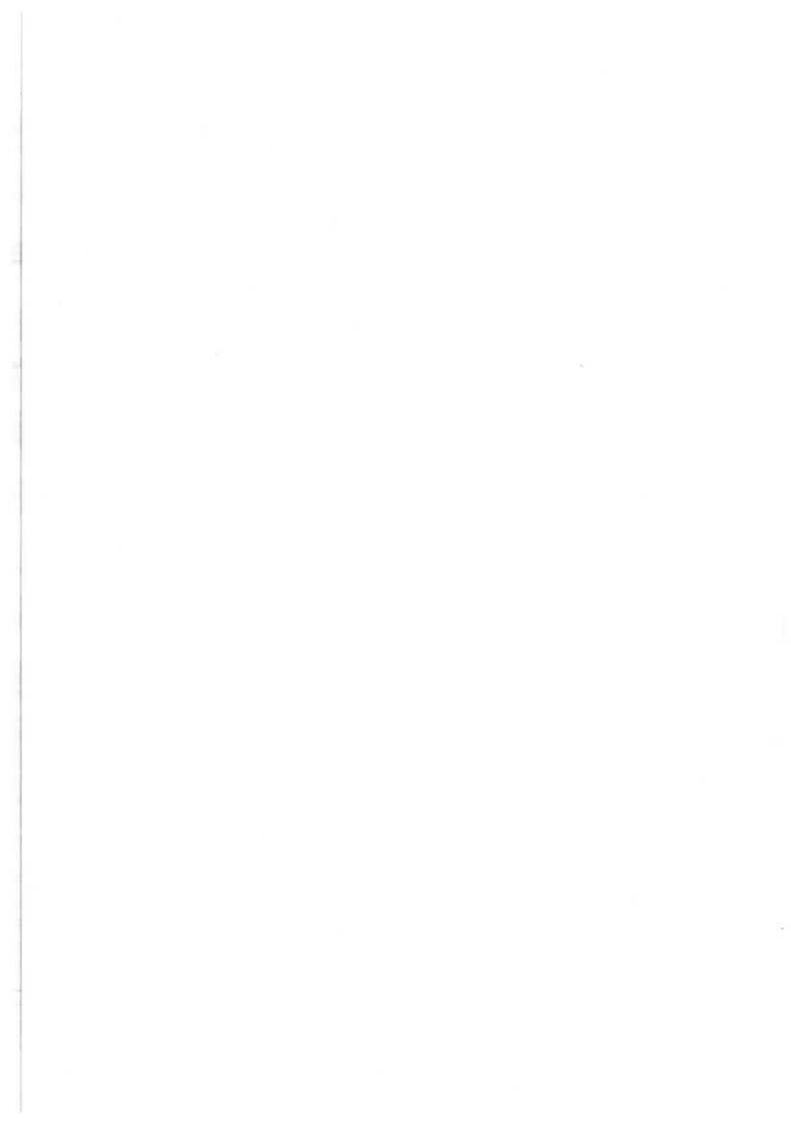
豊 橋 市 教 育 委 員 会

あらい じま い せき
洗 島 遺 跡
あらい じま ごう ぶん
洗 島 1 号 墳

－牛川西部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2008年3月

豊橋市教育委員会



例 言

1. 本書は、豊橋市牛川町字洗島において牛川西部土地地区画整理事業に伴い事前に実施した洗島遺跡の発掘調査報告書である。調査期間は平成17年5月9日～7月30日で、調査面積は1,300㎡である。
2. 発掘調査については、豊橋牛川西部土地地区画整理組合から委託を受けた豊橋市教育委員会が行い、岩瀬彰利（豊橋市美術博物館学芸員）が担当した。
3. 発掘調査に際して、多くの土地所有者をはじめ、地元の方々のご理解・ご協力を頂いた。また、本書の執筆に際して、池谷信之（沼津市文化財センター）、伊藤正人（名古屋市教育委員会）、大塚達朗（南山大学）、岡村 渉（静岡市役所）、長田友也（南山大学）、川添和暁（愛知県埋蔵文化財センター）、瀧本 茂（名古屋市見晴台考古資料館）、田村陽一（三重県埋蔵文化財センター）、山本直人（名古屋大学）の各氏にご教示を頂いている。記して感謝の意を表す次第である。
4. 報告書の作成については、井上佳子・竹嶋浩子・平賀静子・補永亨代・大谷孝世・安田明己・原田祥子の援助を受けた。写真撮影については、発掘調査・出土遺物は岩瀬が行ったが、航空写真撮影は株式会社大地コンサルタントに委託して行った。
5. 本書の執筆は以下のとおりである。編集は岩瀬が行った。

第5章2・B	岩原 剛（豊橋市美術博物館学芸員）
第7章	長岡朋人（聖マリアンナ医科大学）
付載1	池谷信之（沼津市文化財センター）
付載2	株バレオ・ラボ
上記以外	岩瀬彰利
6. 調査区に使用した座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、これを示した。本書に使用した方位はこの座標系に沿うものである。遺構・遺物のスケールについてはそれぞれに明示した。写真の縮尺は任意である。
7. 調査にあたって作成した写真・カラースライド・実測図等の記録や出土遺物は、豊橋市教育委員会において保管・管理している。

目 次

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地	1
2. 歴史的環境	3

第2章 調査の経過

1. 調査に至る経過	5
2. 調査の方法	5

第3章 縄文時代の遺構・遺物

1. 竪穴住居	10
2. 不明遺構	12
3. 土塋	16
4. 遺物	26

第4章 弥生時代以降の遺構・遺物

1. 掘立柱建物	48
2. 橋	51
3. 不明遺構	52
4. 火葬墓	52
5. 溝	58
6. 土塋	62
7. 遺物	67

第5章 洗島1号墳

1. 墳丘	77
2. 遺物	80

第6章 自然遺物

1. 資料の採取状況	86
2. 貝類	86

第7章 人骨

1. 豊橋市洗島遺跡から出土した焼人骨	88
---------------------------	----

第8章 考察

- | | |
|--------------------------|----|
| 1. 洗島遺跡検出の竪穴住居について | 91 |
| 2. 洗島遺跡の性格について | 93 |

付 載

- | | |
|--------------------------------|----|
| 1. 洗島遺跡出土黒曜石製石器の原産地推定 | 95 |
| 2. 火葬墓出土炭化材の樹種と放射性炭素年代測定 | 98 |

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	洗島遺跡位置図 (1/20,000)	1
第2図	洗島遺跡周辺地形図 (1/15,000)	2
第3図	洗島遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)	4
第4図	調査区位置図 (1/2,500)	6
第5図	調査区全体図 (1/400)	7
第6図	遺構位置図-1 (1/200)	8
第7図	遺構位置図-2 (1/200)	9
第8図	縄文時代遺構実測図-1 (1/80)	13
第9図	縄文時代遺構実測図-2 (1/80)	14
第10図	SK-1 遺物出土状況図 (1/10)	15
第11図	SK-2 遺物出土状況図 (1/10)	16
第12図	縄文時代遺構実測図-3 (1/80)	24
第13図	縄文時代遺構実測図-4 (1/80)	25
第14図	縄文土器実測図-1 (1/3)	36
第15図	縄文土器実測図-2 (1/3)	37
第16図	縄文土器実測図-3 (1/3)	38
第17図	石器実測図-1 (1/1・1/2)	45
第18図	石器実測図-2 (1/2)	46
第19図	石器実測図-3 (1/2・1/4)	47
第20図	弥生時代以降遺構実測図-1 (1/80)	53
第21図	弥生時代以降遺構実測図-2 (1/80)	54
第22図	弥生時代以降遺構実測図-3 (1/80)	55
第23図	弥生時代以降遺構実測図-4 (1/80)	56
第24図	弥生時代以降遺構実測図-5 (1/80)	57
第25図	弥生時代以降遺構実測図-6 (1/80)	60
第26図	弥生時代以降遺構実測図-7 (1/80)	61
第27図	弥生時代以降遺構実測図-8 (1/80)	65
第28図	弥生時代以降遺物出土状況図 (1/20)	66
第29図	弥生時代以降出土遺物実測図-1 (1/3)	72
第30図	弥生時代以降出土遺物実測図-2 (1/3)	73
第31図	弥生時代以降出土遺物実測図-3 (1/3)	74
第32図	弥生時代以降出土遺物実測図-4 (1/2)	75
第33図	洗島1号墳調査前測量図・調査後実測図 (1/100)	79

第34図	洗島1号墳出土遺物実測図-1 (1/3)	82
第35図	洗島1号墳出土遺物実測図-2 (1/2)	84
第36図	ヤリ類似例集成 (1/10)	84
第37図	洗島遺跡黒曜石産地推定判別図	96
第38図	火葬墓炭化材の暦年較正図	101

表 目 次

第1表	縄文土器観察表	39
第2表	石器観察表	44
第3表	弥生時代以降出土遺物観察表	75
第4表	洗島1号墳出土遺物観察表	85
第5表	動物遺体種名一覧表	87
第6表	動物遺体出土地一覧表	87
第7表	出土焼人骨	90
第8表	堅穴住居一覧表	92
第9表	洗島遺跡黒曜石産地推定集計表	96
第10表	洗島遺跡黒曜石測定強度	97
第11表	洗島遺跡黒曜石推定結果	97
第12表	推定試料及び処理	99
第13表	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	100

写真図版目次

1-1 調査区全景(南東から)	2 調査区全景(北西から)
2-1 調査区全景(北東から)	2 調査区北側部分(北東から)
3 調査区南側部分-1(北東から)	4 調査区南側部分-2(南東から)
3-1 SB-1全景(南東から)	2 SB-2・3全景(北西から)
4-1 SB-4全景(北から)	2 SB-5全景(南東から)
5-1 SB-6全景(北から)	2 SX-1北側部分(東から)
6-1 SK-1遺物出土状況(北から)	2 SK-1全景(南東から)
7-1 SK-2遺物出土状況(北から)	2 SK-2全景(北西から)

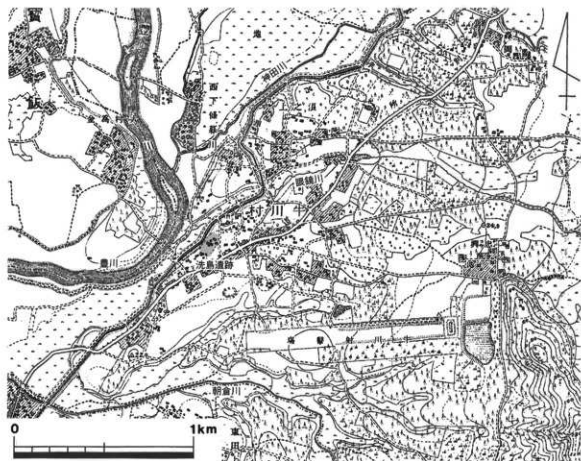
- | | |
|--------------------------|-----------------------|
| 8-1 SK-14全景(北から) | 2 SK-15全景(南東から) |
| 3 SK-17全景(北東から) | 4 SK-18全景(西から) |
| 9-1 SK-30全景(北東から) | 2 SK-35全景(南東から) |
| 3 SK-47全景(東から) | 4 SK-52全景(北西から) |
| 10-1 SZ-1 遺物出土状況(北から) | 2 SZ-2 全景(北から) |
| 3 SZ-2 遺物出土状況(北西から) | 4 SZ-2 全景(北西から) |
| 11-1 SZ-3 全景(北西から) | 2 SX-2 全景(北から) |
| 12-1 SB-12・P2 全景(南東から) | 2 SB-17・P7・P9 全景(東から) |
| 3 SK-59全景(北西から) | 4 SD-1 遺物出土状況図(北から) |
| 13-1 SD-1 南側(南西から) | 2 SD-5 南側(北東から) |
| 3 SD-7・8 全景(北東から) | 4 SD-11全景(北から) |
| 14-1 洗島1号墳調査前全景(南から) | 2 洗島1号墳墳丘断ち割り後全景(西から) |
| 15-1 洗島1号墳墳丘断ち割り後全景(南から) | 2 洗島1号墳完掘後全景(西から) |
| 16-1 洗島1号墳南西部墳丘断面(北西から) | 2 洗島1号墳北東部墳丘断面(南東から) |
| 3 洗島1号墳南西部墳丘断面(北東から) | |
| 17-1 北東側周溝全景(南東から) | 2 南東側周溝全景(北東から) |
| 3 SK-62遺物出土状況(東から) | 4 風倒木-1(西から) |
| 5 風倒木-2(北東から) | |
| 18 縄文土器-1 | |
| 19 縄文土器-2 | |
| 20 縄文土器-3 | |
| 21 縄文土器-4・石器-1 | |
| 22 石器-2・動物遺体(貝類) | |
| 23 弥生時代以降の遺物 | |
| 24 洗島1号墳出土遺物 | |
| 25 炭化材の走査電子顕微鏡写真 | |

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

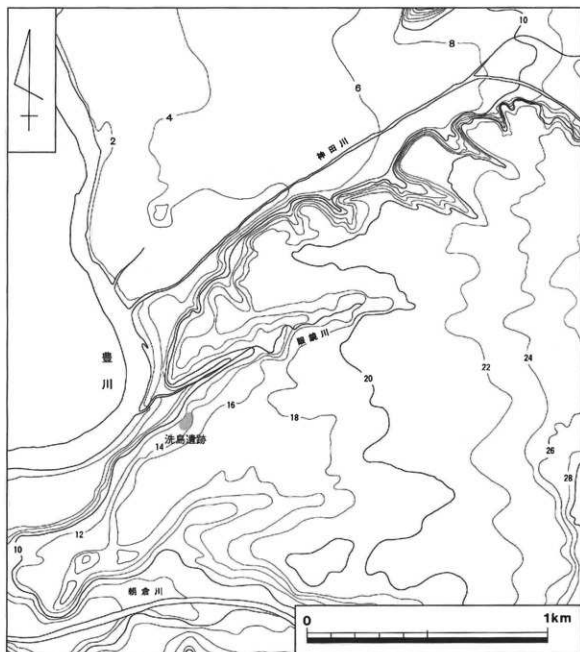
1. 遺跡の立地 (第1・2図)

豊橋市は西側を三河湾、南側を太平洋、東側を弓張山系の山地、北側を豊川に囲まれた都市である。市が接する三河湾は東部湾奥部に相当し、そこには豊川が流入している。豊川は奥三河山間部を源とし、中央構造線に沿って南西に流下する1級河川である。洗島遺跡は、豊橋市中心部から北東に4km程のところにあり、豊川の支流である眼鏡川によって開析された標高14m前後の段丘上に位置する。洗島遺跡が所在する段丘は、朝倉川と神田川によって開析された牛川面と呼ばれる河岸段丘で、中位面に相当する。この牛川面は、西側に広がる豊橋平野の沖積低地と高低差が10～15m程もあり、段丘崖によって明確に区切られている。東側は弓張山系の山地と接しており、そこから南西に向かって緩やかに傾斜している。この牛川面の特徴は、豊川によって形成された河岸段丘上に、その支流の朝倉川や神田川による扇状地性の堆積物が覆っていることで、比較的大きな礫を含んだ粒の揃わない砂礫層が形成されている。

洗島遺跡は、牛川面が更に眼鏡川によって開析された段丘北端部に立地し、ちょうど眼鏡川が豊川へ合流する部分に相当する。この辺りの豊川は大きく蛇行しており、遺跡と豊川との距離は約150m



第1図 洗島遺跡位置図 (1/20,000 明治23年 大日本帝国陸地測量部より)



第2図 洗島遺跡周辺地形図 (1/15,000)

非常に近い。洗島遺跡のある段丘と豊川とは比高差で約10mが測られ、かなりの高低差がある。洗島遺跡は、豊川と眼鏡川の合流点を望む高台にあり、飲料水の確保や水運などの水利の得やすい良好な環境のなかで集落が営まれていた。

参考文献

- 小林久彦 2006 「第1章 遺跡の立地と歴史的環境」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第84集 西側遺跡(Ⅱ)』
1～5頁 豊橋市教育委員会：豊橋
- 水野季彦 1995 「遺跡の立地」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第23集 熊野遺跡』 1～4頁 豊橋市教育
委員会・豊橋遺跡調査会：豊橋

2. 歴史的環境 (第3図)

洗島遺跡のある豊川左岸の段丘縁部は遺跡の密集地である。ここでは、時代ごとに周辺遺跡について述べる。

縄文時代

早期では、竪穴住居や煙道付炉穴が多数検出された眼鏡下池北遺跡(28)がある。このほか、押型文土器が出土したおいほて遺跡(22)や浪ノ上遺跡などが知られている。前期では西側北遺跡から北白川下層Ⅱc式土器や竪穴住居が発見されている。中期では洗島遺跡(1)から中期中葉を中心とした竪穴住居が検出されている。晩期になると周辺の遺跡でも土器片が出土するが、規模の大きな遺跡は確認されていない。

弥生時代

前期では遠賀川式の環濠が検出された白石遺跡がある。中期になると遺跡数は急増し、西側遺跡(15)では竪穴住居が検出している。他にも熊野遺跡、高井遺跡、浪ノ上遺跡、狭間(森岡)遺跡(20)などで、竪穴住居や方形周溝墓などが検出されている。後期になると西側遺跡、浪ノ上遺跡、高井遺跡では大規模な環濠が巡るようになる。

古墳時代

古墳時代は、竪穴住居が白石遺跡、高井遺跡、熊野遺跡、東田遺跡などで、竪穴住居などが確認されている。沖積低地にある東郷廻遺跡(4)や広間遺跡(5)、下河原遺跡(13)、為河原郷遺跡(14)などからも須恵器や土師器が採集されており、低地にも集落が営まれていたようである。古墳は、西側北遺跡から前期古墳が、洗嶋遺跡から中期古墳が確認されている。また、朝倉川左岸には中期の東田古墳がある。全長40m程の前方後円墳である。稲荷山1・2号墳などは中期～後期にかけての方墳と考えられる。

古代以降

古代は、西側遺跡で竪穴住居や土壇などが確認され、西先原遺跡(23)では道路状遺構や横列が検出されている。

中世では、西側遺跡で集落の跡や多数の地下式坑が確認されている。熊野遺跡(18)では15世紀後半と推測される地下式坑が検出され、西側古墓群(17)では12世紀末～15世紀の蔵骨器や五輪塔などが出土している。中世城館址も多く、高井城址や下条館址、下条堀内古屋敷址(3)、二連木城址、浪之上古屋敷址(19)などがある。

近世では、神ヶ谷遺跡(10)や熊野遺跡、西側遺跡などがある。また吉田藩のお庭焼きである牛川焼窯址(27)からは、陶器や窯道具が出土している。



- | | | | | |
|-----------|------------|-------------|---------------|--------------|
| 1. 洗島遺跡 | 2. 牛川洞穴遺跡 | 3. 下条堀内古屋敷址 | 4. 東郷廻遺跡 | 5. 広間遺跡 |
| 6. 高井古墳群 | 7. 城ノ内遺跡 | 8. 萱野遺跡 | 9. 庄司ヶ下遺跡 | 10. 神ヶ谷遺跡 |
| 11. 桑原遺跡 | 12. 上ノ畑遺跡 | 13. 下河原遺跡 | 14. 為河原郷遺跡 | 15. 西側遺跡 |
| 16. 中郷遺跡 | 17. 西側古墓群 | 18. 熊野遺跡 | 19. 浪之上古屋敷址 | 20. 狭間(森岡)遺跡 |
| 21. 西浦遺跡 | 22. おいほて遺跡 | 23. 西先原遺跡 | 24. 仁連木遺跡 | 25. 東田遺跡 |
| 26. 相生塚古墳 | 27. 牛川焼窯址 | 28. 眼鏡下池北遺跡 | 29. 乗小路A～D古墳群 | 30. キジ山古墳群 |

第3図 洗島遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)

第2章 調査の経過

1. 調査に至る経過（第4図）

今回発掘調査を行った洗島遺跡のある豊橋市牛川町は、市中心部から4kmの位置にある交通のよい地域であり、宅地開発等が進んでいる地区である。この地区に対しては、市教育委員会が昭和61年度と平成元年度に分布調査を行って遺跡範囲を推定し、さらに平成2年度と平成9年度には範囲確認調査を実施して、遺跡の範囲を確定している。洗島遺跡は既に存在が確認されていた遺跡であり、分布調査及び範囲確認調査によって遺跡の範囲が確定されたものである。牛川町の周辺部は近年、土地区画整理や宅地開発が進んでいるが、牛川町の中心部は江戸時代から続く道が細い旧来のままの集落であった。このため、平成7年度から豊橋牛川西部土地区画整理組合によって約43haに及ぶ土地区画整理事業が計画・実施され、道路などが整備され始めている。

洗島遺跡の発掘調査は、この土地区画整理事業に伴うものである。土地区画整理地内には、洗島遺跡をはじめ、西側遺跡、中郷遺跡、東側遺跡などの8遺跡が存在している。遺跡の発掘調査は平成14年度の西側遺跡第1次調査から始まり、しばらくは西側遺跡の調査が続いた。洗島遺跡の調査は、土地区画整理事業に伴うものでは西側遺跡・中郷遺跡に次ぐものである。今回の発掘調査は、洗島遺跡における初めての本格的な発掘調査であり、第1次調査に相当する。

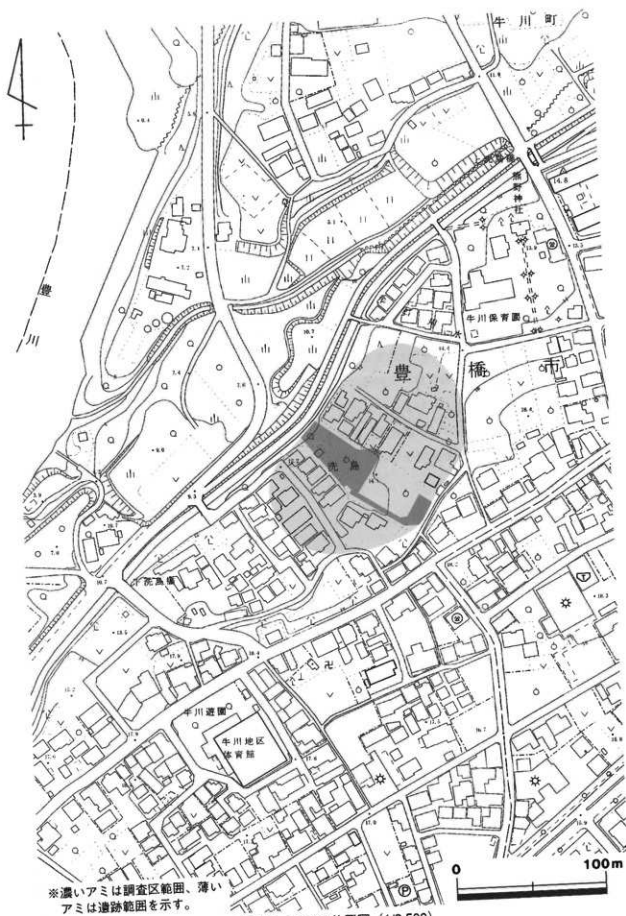
2. 調査の方法

発掘調査は、基本的に切り土によって遺跡を破壊する部分を対象としている。今回の発掘調査は削平される宅地及び道路部分について行っている（第4図）。調査面積は1,300㎡である。調査区の設定については、国土交通省告示に定められた平面直角座標第Ⅷ系に準拠し、この国土座標に合わせて洗島遺跡の北西隅を起点にして、10mグリッドを設定した。この起点より西から東にA～Z、北から南に1～17というように名付け、その交点を地区名としている。

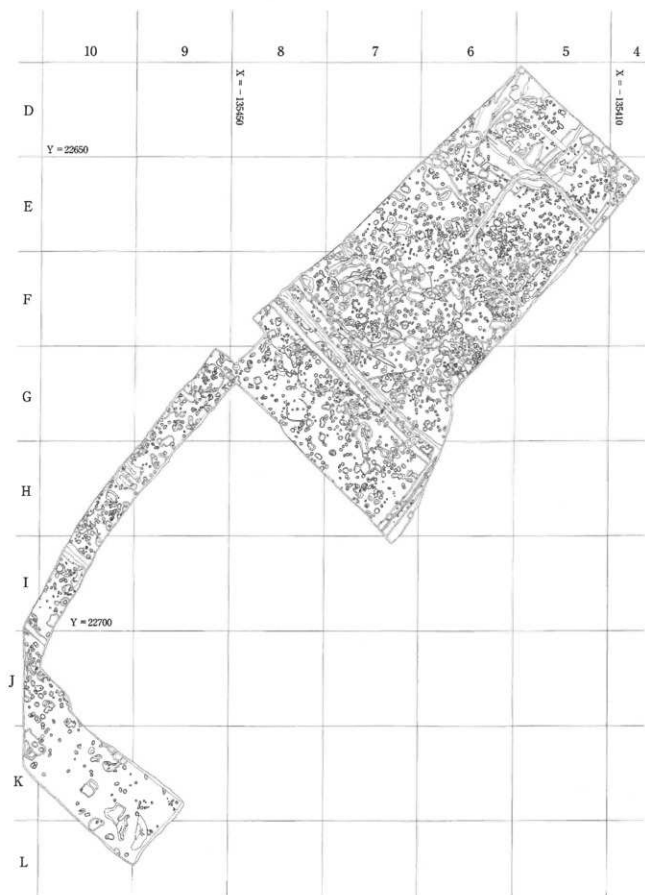
発掘調査の手順は表土を重機を用いて掘削し、後は人力で掘り下げた。具体的な作業順序は以下のとおりである。

1. 重機を使用して調査区内の表土剥ぎを行う。
2. 人力で遺構検出・掘削を行い、遺物を取り上げる。
3. 必要に応じて遺物出土状況図などの関係図面を作成したり、出土状況写真を撮影する。
4. 調査区内の遺構を完掘し、遺構全体図を完成させる。
5. ラジコンヘリを用いて調査区の全体写真を撮影する。

こうして、平成17年5月9日～7月30日の期間にわたり発掘調査を行った。



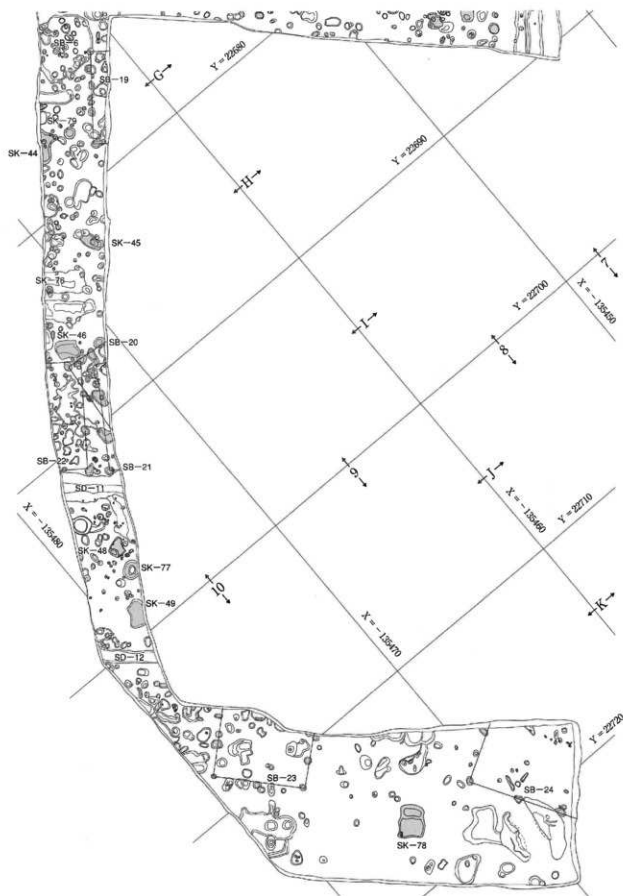
第4図 調査区位置図 (1/2,500)



第5図 調査区全体図 (1/400)



第6図 遺構位置図-1 (1/200)



第7図 遺構位置図-2 (1/200)

第3章 縄文時代の遺構・遺物

縄文時代の遺構は、竪穴住居（SB）6軒、不明遺構（SX）1基、土壇（SK）が多数検出されている。このうち多数検出されている土壇では、帰属時期を明確にするのは困難である。ここでは縄文土器のみが出土し、他時代の遺物を含まない土壇を縄文時代の遺構として扱うものとする。各遺構を種類ごとに説明し、土壇に関しては縄文土器が出土したものを中心に記載する。なお、各遺構の規模等は検出面で測った数値である。

1. 竪穴住居（第8・9図）

竪穴住居の埋土は全て地山（淡褐色粘質土層）に類似しており、その検出は難しかった。当初は竪穴住居と認識せずに掘削してしまっている。このため、住居土層断面図等が作成できていない。竪穴住居は重複しているものと考えたSB-2・3を含めると、6軒の竪穴住居が検出されている。その分布はF-4区～G-9区の範囲内にあり、比較的まとまって検出されている。各竪穴住居の帰属時期については第8章2を参照されたい。なお、住居に重なる土壇で他時代と判明している土壇については、上場線のみを記している。

SB-1（第8図）

F-6区で検出された竪穴住居である。平面形は五角形をなすものと思われ、規模は長軸4.0m、短軸3.5mである。主軸方位はN-45°-Eである。

住居壁は比較的急傾斜であり、深さは約20cmである。壁溝は確認されていない。床面は比較的平坦である。炉については確認できていない。壁面を巡る垂木跡については明確なものはない。ただ、住居に伴うものかは不明であるが、壁と重なる土壇が6基検出されている。これらの土壇は最大径が28cm～60cm、深さ5～39cmである。

柱穴の特定は困難であった。住居の床面に多数の土壇があり、いずれかが柱穴に相当するものと思われるが、特定はできていない。柱穴の可能性のあるものにはP1～P4がある。P1は楕円形をなし、長径は45cm、深さは13cmである。P2は長径44cm、深さ24cmの楕円形、P3は長径29cm、深さ25cmの楕円形、P4は長径52cm、深さ7cmの楕円形をなしている。P1～P4を柱穴と考えても1基を想定すると、五角形配置の可能性はある。

出土遺物は少ないが、P5から中期中葉の山田平式、住居内より前期末葉の大歳山式・十三菩提式、中期中葉の山田平式や船元式系・勝坂式系の土器が出土している。

SB-2（第8図）

F-6・7区で検出された竪穴住居である。住居南東側がSB-3と重複しているが、その前後関係は把握できていない。平面形は円形をなすものと思われ、規模は径4.0mである。住居の北北西側

壁面が約0.8m幅で途切れている。もし、この部分を入口施設と仮定すると、住居の主軸方位は $N-42^{\circ}-W$ と考えられる。

住居壁は比較的急傾斜であり、深さは8~31cmである。壁溝は確認されていない。床面は比較的平坦である。炉については確認できていない。ただ、中央付近に土壌（焼けた痕跡は無し）があり、この土壌で壊された可能性もある。壁面には垂木跡と考えられる小土壌が巡っており、SB-3との重複部分についてはその延長上に土壌が弧状に巡る。これらの土壌は最大径が16cm~48cm、深さ30cm前後であり、15基以上検出されている。

柱穴の可能性のあるものにはP1~P10があり、環状配置が想定される。P1は楕円形で長径36cm、深さは10cm、P2は径28cm、深さ21cmの円形、P3は径32cm、深さ25cmの円形、P4は長径44cm、深さ21cmの双円形、P5は径38cm、深さ42cmの円形、P6は径32cm、深さ53cmの円形、P7は長径40cm、深さ30cmの楕円形、P8は長径52cm、深さ33cmの楕円形、P9は長径64cm深さ27cmの楕円形、P10は長径26cm、深さ38cmの楕円形である。

出土遺物は少ないが、P8・P11から前期末葉の十三菩提式、住居内より前期中葉の清水ノ上Ⅱ式、前期中葉の新道式、前期~中期の土器が出土している。

SB-3（第8図）

F-6・7区で検出された竪穴住居である。住居北西側がSB-2と重複しているが、その前後関係は把握できていない。平面形は隅丸方形をなすものと思われ、規模は長軸5.0m、短軸4.8mである。住居の東側、西側の壁面はSK-30、SK-17でそれぞれ壊されている。住居の主軸方位は $N-34^{\circ}-E$ と考えられる。

住居壁は比較的急傾斜で、深さは15~26cmである。壁溝は確認されていない。床面は比較的平坦である。炉については確認できていない。柱穴の特定は困難であるが、P12~P15の4基は可能性があり、五角形配置の5主柱穴が想定される。P12は径は52cm、深さは26cmの円形、P13は長径48cm、深さ30cmの円形、P14は長径36cm、深さ25cmの楕円形、P15は径32cm、深さ7cmである。

出土遺物は少ないが、P15から前期末葉の十三菩提式、住居内より前期末葉の十三菩提式、前期中葉の新道式土器及び打製石斧が出土している。

SB-4（第8図）

G-6・7区で検出された竪穴住居である。住居北西端はSK-30、南端はSD-7と重複している。平面形は隅丸台形をなすものと思われ、規模は長軸6.4m以上、短軸3.2mである。住居の主軸方位は $N-11^{\circ}-W$ と考えられる。

住居壁は比較的急傾斜で、深さは19~28cmである。壁溝は確認されていない。床面は比較的平坦である。炉については確認できていない。床面にある土壌の中で柱穴と思われるものにはP1~P6の6基があり、五角形配置の6主柱穴が想定される。P1は円形をなし、径は31cm、深さは27cm、P2は長径84cm、深さ38cmの楕円形、P3は長径28cm、深さ45cmの楕円形である。P4は円形をなし、長径は41cm、深さは23cm、P5は長径80cm、深さ31cmの楕円形、P6は長径40cm、深さ31cmの

楕円形である。

出土遺物は少ないが、住居内より前期中葉の北白川下層Ⅱc式、前期末葉の大蔵山式・十三菩提式、中期中葉の山田平式などが出土している。

SB-5 (第9図)

G-7・8区で検出された堅穴住居である。住居北西側にSD-8が重複している。平面形は円形をなすものと思われ、規模は径4.5mである。

住居壁は比較的急傾斜であり、深さは2～20cmである。壁溝は確認されていない。壁面に垂木跡と思われる小土壁も若干認められるが、環状に巡ってはいない。床面は比較的平坦である。炉については確認できていない。

柱穴の特定は難しいが、床面にある多数の土壁の中でP1～P9は柱穴の可能性があり、環状配置の柱穴が想定される。P1は楕円形をなし、長径は36cm、深さは26cmである。P2は長径36cm、深さ16cmの楕円形、P3は長径16cm、深さ15cmの楕円形、P4は長径24cm、深さ9cmの楕円形、P5は長径25cm、深さ11cmの楕円形、P6は長径32cm、深さ16cmの楕円形、P7は径44cm、深さ9cmの楕円形、P8は24cm、深さ12cmの楕円形、P9は長径52cm、深さ17cmの楕円形をなしている。

住居内から遺物は出土していない。

SB-6 (第9図)

G-9区で検出された堅穴住居である。住居南西角は調査区外に延びている。平面形は五角形をなすものと思われ、規模は長軸3.6m、短軸2.9mである。主軸方位はN-2°-Wである。

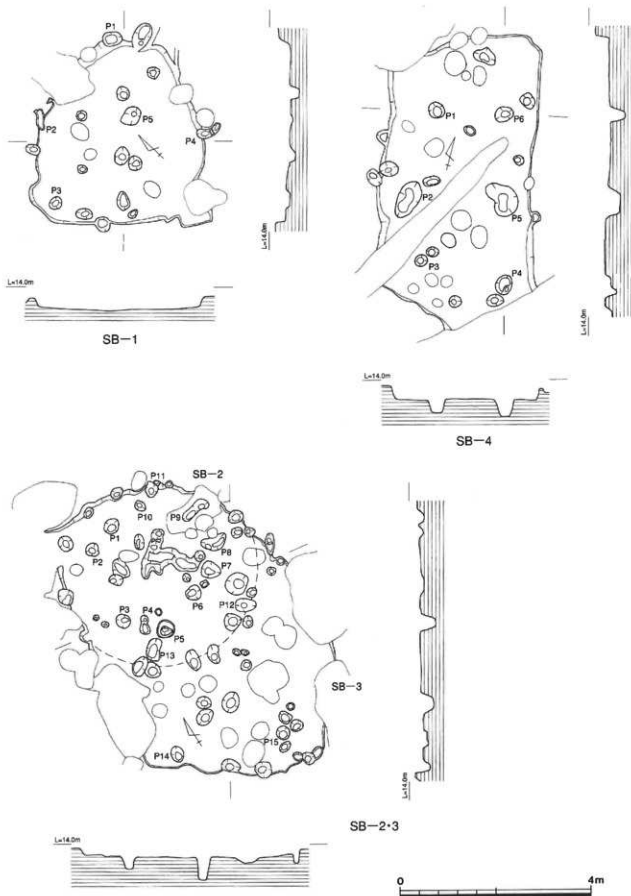
住居壁は比較的急傾斜であり、深さは9～17cmである。壁溝は確認されていない。床面は比較的平坦である。炉については確認できていないが、中央付近に土壁（焼けた痕跡は無し）が集中しており、土壁で壊された可能性もある。壁面を巡る垂木跡については明確なものはない。

柱穴の特定は困難であるが、柱穴の可能性のあるものにP1～P4がある。調査区外に1基を想定すれば五角形配置の5主柱穴が考えられる。P1は円形をなし、径は29cm、深さは7cmである。P2は住居壁と重なっており、長径30cm、深さ10cmの楕円形、P3も住居壁と重なる長径35cm、深さ25cmの楕円形の土壁である。P4は径30cm、深さ14cmの円形をなしている。

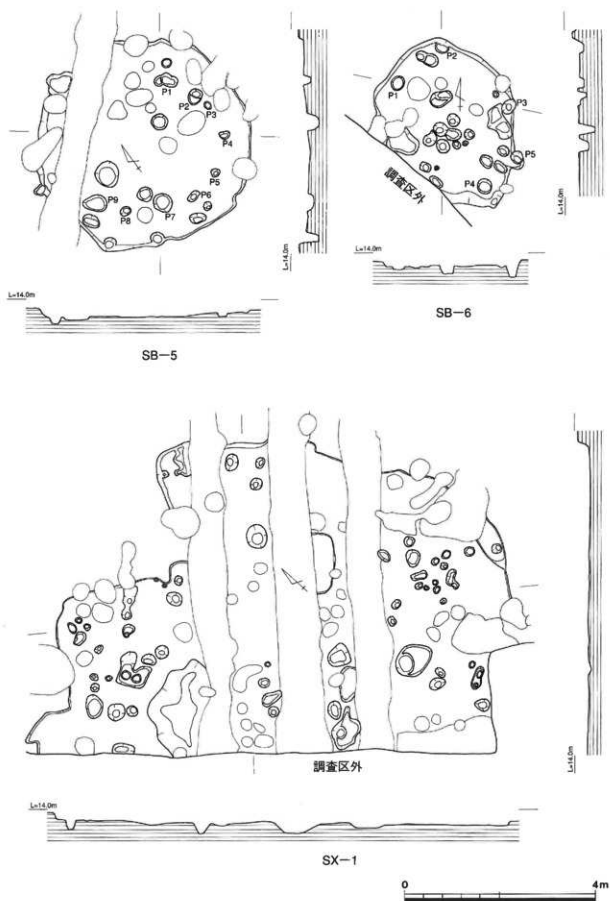
出土遺物は極めて少ない。P5からは中期前葉の五領ヶ台式？が、住居内からは中期の船元式が出土している。

2. 不明遺構 (第9図)

調査区内では、地山を広範囲に掘り込んだ遺構が検出されている。遺構は堅穴住居の埋土と類似し、角張る部分が存在することから、当初は堅穴住居の重複したものと考えた。しかし、範囲が広いことと平面形が不整形なこと、明確な柱穴が確認できなかったことから不明遺構とした。なお、重複する土壁のうち、他時代のものと確認できた土壁については、上場線のみを記している。



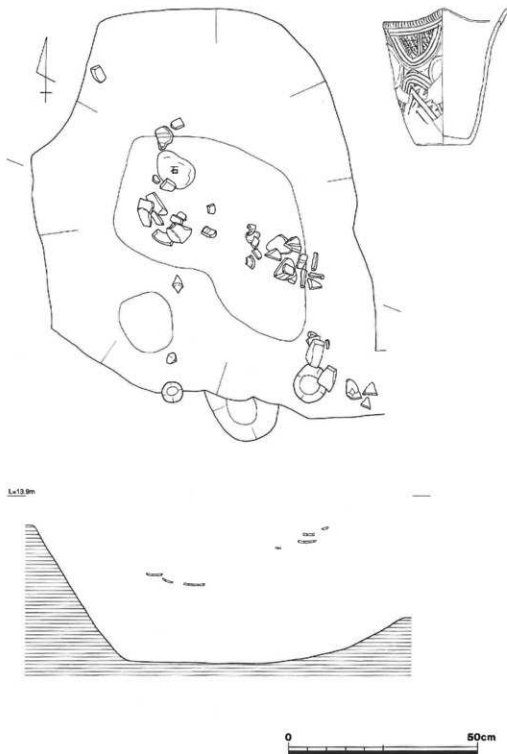
第8図 縄文時代遺構実測図一 (1/80)



第9図 縄文時代遺構実測図-2 (1/80)

SX-1 (第9図)

F-7・8区で検出された不明遺構である。平面形は角のある不整形で、規模は長軸9.6m、短軸6.7m以上である。遺構壁面は比較的急傾斜であり、深さは8~21cmである。床面は比較的平坦である。遺構内には多数の土塊があるが、遺構に伴うものかは不明である。2軒以上の隅丸方形タイプの竪穴住居が重複している可能性もある。

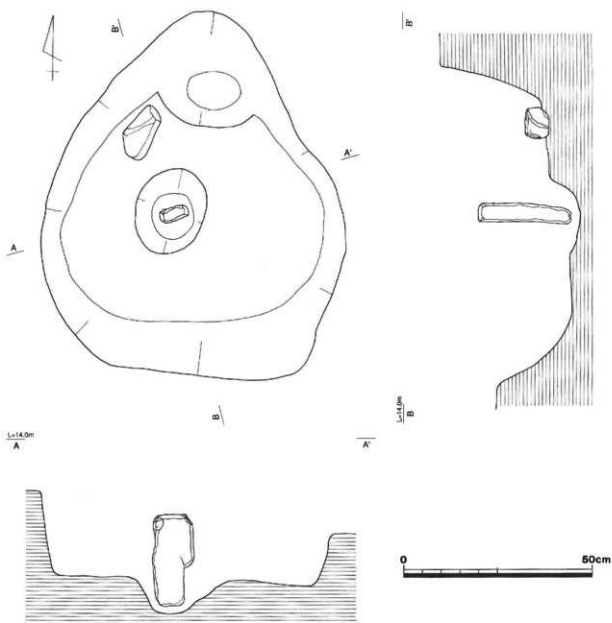


第10図 SK-1 遺物出土状況図 (1/10)

遺物は前期末葉の大歳山式や十三菩提式、中期前葉の五領ヶ台式、北裏C式や船元式が出土している。このことから遺構の時期は中期前葉の北裏C式期のものと考えられる。

3. 土壌 (第10～13図)

土壌は、検出長4mを越える巨大な土壌をはじめ、柱穴状の小さなものまで、様々な形態のものが調査区全体から多数検出されている。また、風倒木痕も数カ所で確認されている。ここでは、縄文土器のみが出土している土壌を中心に述べるものとする。



第11図 SK-2 遺物出土状況図 (1/10)

SK-1 (第10・12図)

F-5区で検出された土壌で、他の土壌と重複しているが平面形は長方形に近く、規模は長径99cm、短径83cm、深さは50cmである。埋土は暗灰色砂質土である。土壌内からは中期中葉の山田平式土器がまともに出土している(第10図)。石錐も出土している。このことから土壌は縄文時代中期中葉のものと思われる。

SK-2 (第11・12図)

E-6区で検出された土壌で、中央部分は更に掘り窪められている。平面形は突出部のある円形で、規模は長径98cm、短径80cm、深さは19cmであり、中央部の窪みは長径20cm、短径17cm、深さ25cmの楕円形をなしている。中央窪みには砥石(第19図22)が直立した状態で出土している(第11図)。埋土は茶褐色砂質土である。土壌内からは少量の焼人骨が散在して出土していることから、土壌墓である可能性も考えられる。土器では中期中葉の山田平式土器が出土し、土壌の帰属時期は縄文時代中期中葉のものと思われる。

SK-3 (第12図)

D-5区古墳内で検出された土壌で、平面形は楕円形、規模は長径199cm、短径68cm、深さは33cmである。埋土は黒褐色砂質土である。出土遺物には縄文土器の細片があり、時期は縄文時代のものと思われる。

SK-4 (第12図)

D-5・6区古墳内で検出された土壌で、平面形は楕円形、規模は長径84cm、短径44cm、深さは36cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には縄文土器の細片があり、時期は縄文時代と思われる。

SK-5 (第12図)

D-5区古墳内で検出された土壌で、平面形は双円形、規模は長径52cm、短径24cm、深さは16cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には縄文の施された縄文土器片があり、時期は中期のものと思われる。

SK-6 (第12図)

D-5・6区古墳内で検出された土壌で、平面形はほぼ円形、規模は径36cm、深さは26cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には前期末葉の十三菩提式土器があり、時期は前期末葉のものと思われる。

SK-7 (第12図)

E-6区で検出された土壌で、平面形は楕円形、規模は長径48cm、短径26cm、深さは12cmである。

埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には前期末葉の十三菩提式、中期前葉の五領ヶ台式があり、時期は中期前葉のものと思われる。

SK-8 (第12図)

D-6区で検出された土壌で、平面形は楕円形、規模は長径104cm、短径81cm、深さは32cmである。土壌内は更に径34cm、深さ48cmの円形の掘り込みが認められる。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には中期の勝坂式系があり、時期は中期前半のものと思われる。

SK-9 (第12図)

E-7区で検出された土壌で、平面形は楕円形と思われるが、西端は調査区外へ延びている。規模は長径144cm以上、短径76cm、深さは26cmである。埋土は黒灰色砂質土である。出土遺物には縄文土器の浅鉢と思われるものがあり、時期は中期と思われる。

SK-10 (第12図)

E-7区で検出された土壌で、平面形は円形に近く、規模は径27cm、深さは30cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には中期中葉の山田平式があり、土壌の時期は中期中葉と思われる。

SK-11 (第12図)

E-6区で検出された土壌で、平面形は楕円形、規模は長径36cm、短径20cm、深さは33cmである。埋土は黒灰色砂質土である。出土遺物には中期中葉の山田平式があり、土壌の時期は中期中葉と思われる。

SK-12 (第12図)

E-6区で検出された土壌で、一部他の土壌と重複している。平面形は楕円形、規模は長径120cm、短径44cm、深さは11cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には前期末葉～中期前葉と思われる土器があり、時期はその頃のものと思われる。

SK-13 (第12図)

E-6区で検出された土壌で、一部他の土壌と重複している。平面形は楕円形、規模は長径121cm、短径64cm、深さは16cmである。埋土は黒灰色砂質土である。出土遺物には縄文土器の細片があり、時期は縄文時代のものと思われる。

SK-14 (第12図)

E-6区で検出された土壌で、一部他の土壌と重複している。平面形は楕円形、規模は長径224cm、短径132cm、深さは38cmである。埋土は黒灰色砂質土である。出土遺物には土器底部破片があり、時期は前期後葉頃のものと思われる。

SK-15 (第12図)

E・F-7区で検出された不整形の土壌で、規模は長径220cm、短径112cm、深さは49cmである。埋土は黒灰色砂質土である。出土遺物には前期前葉の中越式や清水ノ上Ⅱ式、中期前葉の北裏C式、船元Ⅱ式などがあり、時期は中期前葉のものと思われる。

SK-16 (第12図)

F-6・7区で検出された不整形の土壌で、他の土壌が重複している。規模は長径289cm、短径181cm、深さは49cmである。埋土は黒灰色砂質土である。出土遺物には前期中葉の北白川下層Ⅱ式？、末葉の大歳山式や中期前葉の北裏C式？があり、時期は中期前葉のものと思われる。

SK-17 (第12図)

F-6・7区で検出された土壌で、SB-3や他の土壌と重複している。平面形は楕円形、規模は長径212cm、短径120cm、深さは36cmである。埋土は黒褐色砂質土である。出土遺物に前期中葉の北白川下層Ⅱ式？、中期前葉の五領ヶ台式などがあり、時期は中期前葉のものと思われる。

SK-18 (第12図)

F-6区で検出された土壌で、他の土壌が重複している。平面形は突出部のある楕円形、規模は長径241cm、短径141cm、深さは49cmである。土壌の東端から未加工のタマキガイ（左殻）が1個体出土している。埋土は黒灰色砂質土である。出土遺物には中期前葉の北裏C式があり、時期は中期前葉と思われる。

SK-19 (第12図)

F-6区で検出された土壌で、平面形は円形と方形が重なった形であり、規模は長径72cm、短径44cm、深さは44cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には縄文土器片があり、時期は縄文時代のものと思われる。

SK-20 (第12図)

F-6区で検出された土壌で、平面形はほぼ円形、規模は径48cm、深さは17cmである。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には中期前葉と思われる土器があり、時期は中期前葉のものと思われる。

SK-21 (第12図)

F-6区で検出された土壌で、北端はSD-1で破壊されている。平面形は楕円形、規模は長径239cm、短径52cm、深さは12cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には前期末葉十三菩提式と前期中葉の山田平式などがあり、時期は前期中葉のものと思われる。

SK-22 (第12図)

F-6区で検出された土壌で、平面形は双円形、規模は長径92cm、短径35cm、深さは34cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には中期前葉の五領ヶ台式があり、時期は中期前葉のものと思われる。

SK-23 (第12図)

F-6区で検出された土壌で、SB-1と重複している。平面形は長方形に近く、規模は長径201cm、短径92cm、深さは25cmである。埋土は黒灰色砂質土である。出土遺物には中期中葉の山田平式や船元式があり、時期は中期中葉と思われる。

SK-24 (第12図)

F・G-6区で検出された土壌で、平面形は不整形で、規模は長径132cm、短径76cm、深さは33cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には前期末葉の十三菩提式、中期前葉の五領ヶ台式、船元式などがあり、土壌の時期は中期前葉と思われる。

SK-25 (第12図)

G-6区で検出された土壌で、平面形は楕円形、規模は長径95cm、短径60cm、深さは27cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には前期後葉や中期前葉の五領ヶ台式があり、土壌の時期は中期中葉と思われる。

SK-26 (第12図)

G-6区で検出された土壌で、平面形は楕円形、規模は長径59cm、短径44cm、深さは22cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には前期末葉の十三菩提式があり、時期は前期末葉のものと思われる。

SK-27 (第12図)

G-6区で検出された土壌で、一部は他の土壌と重複している。平面形は楕円形、規模は長径104cm、短径52cm、深さは7cmである。土壌中央と端部に最大で深さ39cmの掘り込みがある。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には中期前葉の五領ヶ台式があり、時期は中期前葉のものと思われる。

SK-28 (第12図)

F-6区で検出された土壌で、SB-1と重複している。平面形は双円形、規模は長径88cm、短径72cm、深さは32cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には中期中葉山田平式があり、時期は中期中葉のものと思われる。

SK-29 (第12図)

F・G-6区で検出された楕円形の土壌で、一部は他の土壌と重複している。規模は長径124cm、

短径84cm、深さは15cmである。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には前期末葉の十三菩提式があり、時期は前期末葉のものと思われる。

SK-30 (第13図)

F・G-7・8区で検出された楕円形気味の土壇で、規模は長径201cm、短径140cm、深さは33cmである。土壇内北側に径約25cmほどで、床面を20cmほど掘り込んだ土壇が2基ある。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には前期末葉の大蔵山式や中期前葉の五領ヶ台式があり、時期は中期前葉のものと思われる。

SK-31 (第13図)

G-7区で検出された土壇で、SB-4の住居壁と重複している。平面形は円形、規模は径35cm、深さは30cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には前期末葉の十三菩提式があり、時期は前期末葉のものと思われる。

SK-32 (第13図)

F-7区で検出された土壇で、SK-33と重複している。平面形は楕円形、規模は長径84cm、短径52cm、深さは28cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には前期中葉の北白川下層Ⅱ式があり、時期は前期中葉のものと思われる。

SK-33 (第13図)

F-7区で検出された土壇で、SK-32と重複している。平面形は楕円形、規模は長径128cm、短径64cm、深さは23cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には中期前葉の北裏C式などがあり、時期は中期前葉のものと思われる。

SK-34 (第13図)

F-7区で検出された土壇で、一部他の土壇と重なっている。平面形はやや弧状をなし、規模は長径288cm、短径52cm、深さは32cmである。埋土は黒灰色砂質土である。出土遺物には前期中～後葉頃の土器底部破片があり、土壇の時期は前期中～後葉頃と思われる。

SK-35 (第13図)

F-7区で検出された土壇で、土壇内を他の土壇が掘り込んでいる。平面形はやや弧状をなし、規模は長径432cm、短径121cm、深さは53cmである。埋土は黒灰色砂質土である。出土遺物には中期前葉の五領ヶ台式などがあり、土壇の時期は中期前葉と思われる。

SK-36 (第13図)

F-7区で検出された土壇で、SX-1と重複している。平面形は長楕円形、規模は長径139cm、

短径32cm、深さは20cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には中期前葉の船元Ⅱ式があり、時期は中期前葉のものと思われる。

SK-37 (第13図)

F-7区で検出された土壌で、平面形は楕円形、規模は長径40cm、短径32cm、深さは27cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には中期前葉の五領ヶ台式？があり、時期は中期前葉のものと思われる。

SK-38 (第13図)

F-7区で検出された土壌で、一部で他の土壌と重複している。平面形は楕円形、規模は長径116cm、短径60cm、深さは46cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には縄文土器の細片があり、時期は縄文時代のものと思われる。

SK-39 (第13図)

F-7区で検出された楕円形の土壌で、規模は長径38cm、短径32cm、深さは32cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には中期中葉の藤内Ⅰ式があり、時期は中期中葉のものと思われる。

SK-40 (第13図)

G-7区で検出された楕円形気味の土壌で、SB-4や他の土壌と重複している。規模は長径188cm以上、短径120cm以上、深さは6cmと広くて浅い土壌である。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には前期中葉の北白川下層Ⅱ式？や中期前葉の北裏C式があり、時期は中期前葉のものと思われる。

SK-41 (第13図)

G-7区で検出された土壌で、SK-40と重複している。平面形は楕円形、規模は長径68cm、短径48cm、深さは19cmである。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には縄文土器の細片があり、時期は縄文時代と思われる。

SK-42 (第13図)

G-7区で検出された土壌で、平面形は楕円形、規模は長径79cm、短径55cm、深さは36cmである。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には中期前葉の北裏C式があり、時期は中期前葉と思われる。

SK-43 (第13図)

F-8区・SX-1内で検出された土壌で、平面形は楕円形、規模は長径84cm、短径64cm、深さは18cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には中期中葉の山田平式があり、時期は中期中葉のものと思われる。

SK-44 (第13図)

G-9区で検出された土壌で、一部は調査区外に延びている。平面形は楕円形に近いものと思われ、規模は長径188cm、短径80cm以上、深さは15cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には縄文土器の細片があり、土壌の時期は縄文時代のものと思われる。

SK-45 (第13図)

H-9区で検出された土壌で、一部は他の土壌と重複している。平面形は楕円形で、規模は長径164cm、短径68cm、深さは44cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には中期前葉の北裏C式があり、土壌の時期は中期前葉と思われる。

SK-46 (第13図)

H-10区で検出された土壌で、平面形は長方形に近く、規模は長径140cm、短径92cm、深さは39cmである。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には縄文土器の細片があり、土壌の時期は縄文時代のものと思われる。

SK-47 (第13図)

G-8区で検出された土壌で、平面形は楕円形、規模は長径240cm、短径84cm、深さは43cmである。中央付近が長径84cm、深さ8cmほど更に掘り込まれている。埋土は黒灰褐色砂質土である。出土遺物には縄文土器の細片があり、土壌の時期は縄文時代のものと思われる。

SK-48 (第13図)

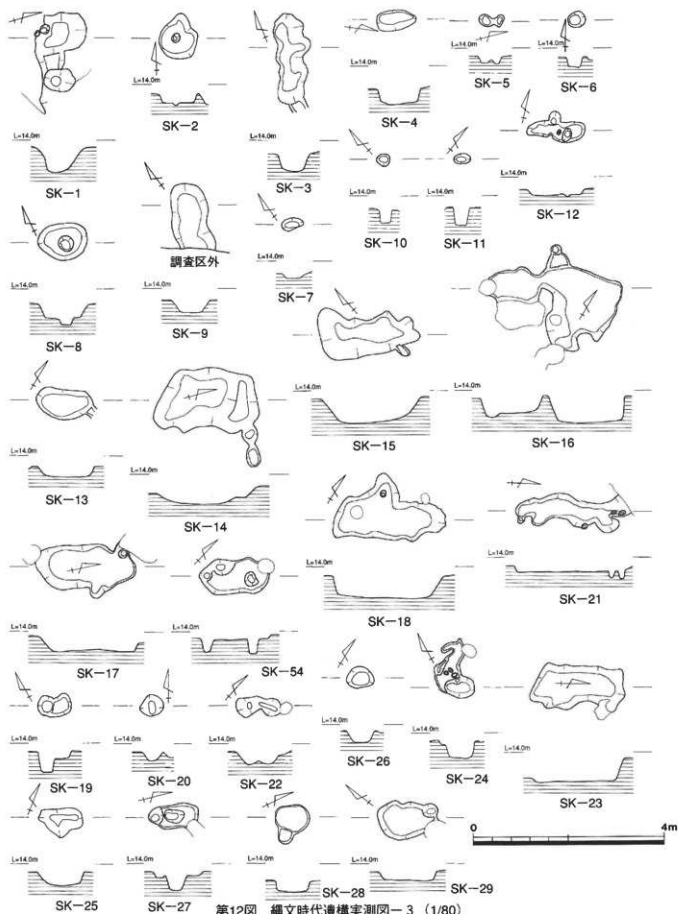
I-10区で検出された土壌で、平面形は台形に近く、規模は長径104cm、短径81cm、深さは27cmである。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には中期前葉の北裏C式があり、中期前葉のものと思われる。

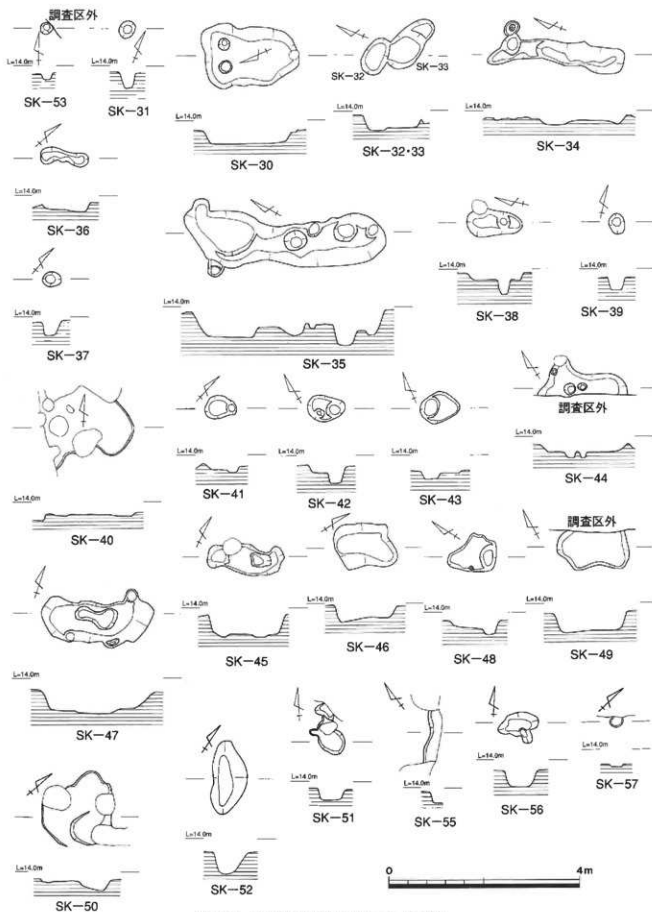
SK-49 (第13図)

I-10区で検出された土壌で、一部を調査区外で欠いている。平面形は楕円形に近く、規模は長径148cm、短径72cm以上、深さは41cmである。埋土は灰褐色砂質土である。出土遺物には縄文土器の細片があり、土壌の時期は縄文時代のものと思われる。

SK-50 (第13図)

D-5・6区の古墳内で検出された円形気味の土壌で、他の土壌と重複している。規模は径163cm、深さは6cmと広くて浅く、一部は更に窪んでいる。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には中期前葉の五領ヶ台式があり、時期は中期前葉のものと思われる。





第13図 縄文時代遺構実測図-4 (1/80)

SK-51 (第13図)

F-5区で検出された土壌で、SD-1や他の土壌と重複している。平面形は不整形、規模は長径120cm、短径52cm、深さは22cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には中期前葉の船元Ⅱ式があり、時期は中期前葉と思われる。

SK-52 (第13図)

E-6区で検出された土壌で、平面形は楕円形、規模は長径156cm、短径72cm、深さは46cmである。埋土は黒灰色砂質土である。出土遺物には中期前葉の五領ヶ台式や北裏C式があり、時期は中期前葉と思われる。

SK-53 (第13図)

G-6区で検出された土壌で、平面形は円形、規模は径28cm、深さは12cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には前期と思われる土器があり、時期は前期頃のものと思われる。

SK-54 (第12図)

F-7区で検出された土壌で、一部に他の土壌が重複している。平面形は楕円形、規模は長径148cm、短径76cm、深さは9cmであり、床面は更に掘り込まれている。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には中期前半の船元式があり、土壌の時期は中期前半のものと思われる。

SK-55 (第13図)

F-7区で検出された土壌で、大半がSD-6や他の土壌に壊されており平面形はわからない。規模は長径112cm以上、短径28cm以上、深さは14cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には前期末葉の大蔵山式があり、土壌の時期は前期末葉と思われる。

SK-56 (第13図)

G-7区で検出された土壌で、平面形は突出部のある楕円形、規模は長径88cm、短径52cm、深さは32cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には前期と思われる縄文土器の細片があり、土壌の時期は前期頃のものと思われる。

SK-57 (第13図)

F-8区で検出された土壌で、一部はSD-7で壊されている。平面形は円形になるものと思われ、規模は径27cm、深さは4cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には中期前葉の五領ヶ台式、中葉の山田平式などがあり、土壌の時期は中期中葉のものと思われる。

4. 遺物 (第14～19図、第1・2表)

今回の調査で出土した遺物のうち、縄文時代の遺物はコンテナ箱(34×54×20cm)に5箱程出土している。その内訳は大半が縄文土器であり、他に石器や自然遺物もみられる。以下では、縄文土器、石器に分けて説明し、自然遺物については第6章で説明する。

A. 縄文土器 (第14～16図・第1表)

ここでは縄文土器について、遺構ごとに説明する。なお、縄文土器についての細かな調整・法量等は第1表の観察表に記している。

SB-1 (第14図1～10)

1は口縁部破片で、縄文が内外面に施されている。口縁外面と口縁端部内面に連続爪形文のある細い隆帯が貼り付けられている。2は体部破片で、縄文地に細い隆帯が2条貼り付けられている。3は屈曲する口縁部付近の破片で、縄文が施されている。4・5は口縁部破片で、半截竹管によって半隆起線文が横位に入れられ、端部には連続爪形文が施されている。6は体部破片で、半截竹管文と縄文が施されている。7は口縁部破片であり、端部は肥厚されて縄文が入れられている。外面には縄文が施されている。8は体部破片で、縄文が施されている。9は体部破片で、沈線文が入れられている。10はP5出土土器である。口縁部は僅かに外反し、端部は丸い。外面に縄文が施されている。

SB-2 (第14図11～17)

11は口縁部破片で、外面にアナガラ属の貝殻腹縁による刺突文が施されている。12・13は体部破片で、縄文が施されている。14は体部破片で、刺突文と思われる窪みがみられる。15は底部破片で、底面は平坦で僅かに外周があり、器壁は底から胴部に向かって膨らみながら立ち上がっている。

16はP8出土の土器である。口縁部付近の破片で、縄文地に連続爪形文の施された隆帯が貼り付けられている。

17はP11出土の土器である。縦位に半截竹管による集合沈線文が施されている。

SB-3 (第14図18～21)

18は体部破片で、縄文地に細い隆帯が貼り付けられている。19は口縁部付近の破片で、肥厚されて連続爪形文が施されている。20は体部破片で、連続刺突文が施されている。

21はP15出土の土器である。体部破片で、縄文地に半截竹管による半隆起線文が施されている。

SB-4 (第14図22～28)

22は体部破片で、縄文地に細い隆帯が貼り付けられ、隆帯には刻目が施されている。23は体部破片で、縄文地に細い隆帯が2条貼り付けられ、隆帯上は連続爪形文が施されている。24・25は体部破片

で、半載竹管によって半隆起線文が施され、24には印刻文もみられる。26～28は体部破片で、縄文が施されている。

SB-6 (第14図29・30)

29は体部破片で、縄文が施されている。

30はP5出土の土器である。口縁部破片で、半載竹管によって集合沈線文が斜位に施されている。

SX-1 (第14図31～43)

31は口縁部破片で、内面が若干肥厚され、縄文が内外面および口唇部に施されている。口縁端部に細い隆帯が貼り付けられている。32はやや内湾する口縁部破片で、縄文地に細い隆帯が4条貼り付けられ、隆帯上は連続爪形文が施されている。33は内湾する口縁部の破片で、縄文地に細い隆帯が貼り付けられている。34は口縁部破片で、半載竹管によって集合沈線文が横位・斜位に入れられている。35～39は半載竹管による半隆起線文や竹管文が施された体部破片で、37は縄文も施されている。40は口縁部破片であり、口唇部は面をなし、口縁外面に幅広の半載竹管による半隆起線文をもつ。41は体部破片で、隆帯が貼り付けられている。42は縄文が施された体部破片である。43は無文の口縁部破片である。

SK-1 (第14図44～51)

44は波状の内湾する口縁部破片である。内外面の波頂部から隆帯が垂下し、更に外面には隆帯が口縁部添いに左右に延びている。隆帯には爪形文が施されている。外面には集合沈線文がみられる。45は体部破片で、細い隆帯が貼り付けられ、刻目が施されている。46は口縁部付近の破片で、大形の連続爪形文が施されている。47は図上ではほぼ器形が復元できた深鉢である。器形は、口縁部は波状でやや外反し、胴部から底部にかけてはほぼ円筒状に垂下する。波状口縁は1ないし2箇所の波頂部を有すものと推測される。口縁部の文様は、口縁端部に半載竹管による連続爪形文を横位に1条、その下には半隆起線文を2条巡らしている。その下に半載竹管の半隆起線文による連弧状の区画を巡らしている。連弧状区画内は縄文地で、中心付近に半隆起線文を垂下させ、そこから左右に三角形印刻文を展開させている。三角形印刻文には、三角形頂点から沈線を延ばすものもみられる。巡らされた連弧状区画の間には、粘土板を貼り付けて縁を隆起させた無文の区画が配置され、更にその間下には半隆起線文で区画して、沈線文と三角形印刻文を千鳥状に配置した文様が施されている。口縁部文様帯と胴部文様帯は分かれておらず、連続した文様構成をとり、在地土器の文様構成と異なっている。48は体部破片で、集合沈線文が施されている。49は渦巻き状の突起である。50は浅鉢の口縁部破片である。口縁部は内湾し、端部はやや肥厚している。外面に突起が貼り付けられて連続刺突文が入れられている。51は浅鉢の口縁部破片である。口縁部は屈折し、2条の押し引きによる連続刺突文が巡らされている。屈曲部には刻目が巡らされている。

SK-2 (第14図52・53)

52は口縁部破片で、端部には連続爪形文を施し、その下に半截竹管による半隆起線文を横位に入れている。53は体部破片で、半隆起線文が施されている。

SK-5 (第14図54)

54は縄文の施された体部破片である。

SK-6 (第14図55)

55は口縁部破片で、端部は肥厚され面を有す。外面は縄文地で連続爪形文が施された隆帯が貼り付けられている。

SK-7 (第14図56～58)

56は口縁部破片で、端部に刻目が入れている。外面は半截竹管文が施されている。57は体部破片で、連続爪形文が施された隆帯が貼り付けられている。58は体部破片で、半截竹管による半隆起線文を横位に施し、その下に連続刺突文を施している。

SK-8 (第14図59)

59は外傾する口縁部破片で、端部付近に1条の隆帯を貼り付けている。

SK-9 (第14図60)

60は深鉢または浅鉢の口縁部破片で、口縁部は外傾して端部は面をなす。

SK-10 (第14図61)

61は半截竹管による半隆起線文の施された体部破片である。

SK-11 (第14図62)

62は口縁部付近の破片と思われ、粘土板を貼り付けて肥厚した口縁部に縄文を施している。

SK-12 (第14図63)

63は体部破片で、半截竹管文が施文されている。

SK-14 (第14図64)

64は底部破片であり、底面は外側に張り出している。

SK-15 (第15図65～72)

65はやや外反する口縁部破片で、器壁は薄い。端部に連続した刻目が入れている。口縁部には

垂下する隆帯が剥がれた痕跡がある。66は体部破片であり、半隆起線文と連続刺突文がみられる。67は外面に刺突文のある口縁部付近の破片である。68は口縁部破片で、口縁部が肥厚され縁帯をなしている。69は口縁部付近の破片と思われ、肥厚され縁帯をなしている。連続爪形文が施されていた可能性がある。70はやや外反する口縁部破片で、内外面に縄文が施されている。外面にはハイガイの押圧痕がみられる。71は体部破片で、縄文地に刻目の入れられた隆帯が貼り付けられている。72は縄文が施された体部破片である。

SK-16 (第15図73~78)

73はやや内湾する波状口縁の破片である。口縁端部は肥厚されて内側に面をもつ。摩滅が著しいため文様は不鮮明であるが、外面は縄文地に貼り付け隆帯があり、口唇面には縄文が施されたようである。74は体部破片であり、縄文地に連続爪形文が施された隆帯が2条貼り付けられている。75は口縁部付近の破片と思われ、外面には刺突文、段部には刻目が入れている。76は口縁部破片であり、口縁部は部分的に肥厚され、外面に縄文?が施されている。77は体部破片であり、縦位と横位に半載竹管による半隆起線文が施されている。78は縄文の体部破片である。

SK-17 (第15図79~82)

79は体部破片であり、無文地に細い隆帯が貼り付けられている。80は口縁部破片であり、口縁は端部付近で屈曲し、口唇部に連続刺突文が入れている。口縁部文様帯は隆帯で区切られ、半載竹管による半隆起線文で区画文が施されている。81は口縁部付近の破片と思われ、外面には半載竹管文が施されている。82は縄文の施された口縁部破片であり、口唇部は肥厚されている。

SK-18 (第15図83~87)

83は口縁部破片である。口縁部は縁帯をなし、縁帯部は縄文地に刺突文が施され、縁帯下端に半載竹管による半隆起線文が入れている。84は体部破片であり、半隆起線文と刺突文が施されている。85は半隆起線文の施された口縁部付近の破片である。86は体部破片であり、沈線文が入れている。87は底部破片である。

SK-20 (第15図88)

88は口縁部破片である。口縁部はやや内湾し、縄文が施されている。

SK-21 (第15図89・90)

89は体部破片であり、縄文地に細い隆帯が貼り付けられている。90は縁帯部のある口縁部付近の破片である。

SK-22 (第15図91)

91は内湾する口縁部の破片である。内面は若干肥厚され、外面は半載竹管による集合沈線文が横位

に2条引かれ、その間を縦位の半載竹管で補填している。口縁端部には刻目が連続して入れられている。

SK-23 (第15図92~95)

92は体部破片であり、細い隆帯が3条貼り付けられている。93は口縁部破片であり、半載竹管による連続爪形文が入れている。94は体部破片で、半載竹管による集合沈線文が施されている。95は縄文の施された体部破片である。

SK-24 (第15図96)

96はやや内湾する波状口縁の破片である。口縁端部は肥厚されて内側に面をもち、そこに縄文が施されている。外面は縄文が施され、そこに刻目が施された2条の隆帯が口縁部添いと水平に貼り付けられている。

SK-25 (第15図97・98)

97は体部破片である。縄文帯の上部に無文帯があり、そこに半載竹管文が施されている。98は口縁部破片であり、半載竹管による連続爪形文及び半隆起線文が施されている。

SK-26 (第15図99)

99は体部破片である。縄文地の上に素文の隆帯が貼り付けられている。

SK-27 (第15図100)

100は体部破片である。半載竹管による集合沈線文が施されている。

SK-28 (第15図101)

101は口縁部付近の破片と思われ、縁帯を有す口縁部の下端部分と考えられる。

SK-29 (第15図102)

102は体部破片である。縄文地の上に素文の隆帯が貼り付けられている。

SK-30 (第15図103~105)

103は口縁部破片である。口縁部はやや内湾し、端部は面をなして内側に張り出す。内面も若干肥厚されている。縄文は内外面及び端部に施文されている。104は体部破片であり、半隆起線文が施されている。105は体部破片と思われ、丈高の隆帯が貼り付けられている。

SK-31 (第15図106)

106は体部破片である。縄文地の上に素文の隆帯が貼り付けられている。

SK-32 (第15図107)

107はやや内湾する口縁の破片である。口縁端部は面をもち、そこに縄文が施されている。外面は縄文地に隆帯が貼り付けられている。

SK-33 (第15図108・109)

108は口縁部破片であり、半載竹管による連続爪形文が2条みられる。109は底面からやや外傾して立ち上がる底部破片である。

SK-34 (第15図110)

110は底面破片である。底面は外側に強く張り出している。

SK-35 (第15図111～117)

111は体部破片であり、縄文地？に細い隆帯が貼り付けられている。112は口縁部近の破片と思われる、半載竹管文が水平に入れられ、その下に半載竹管による格子文が施されている。113は体部破片と思われる、半載竹管による集合沈線文が縦位に施されている。114はやや外傾する口縁部破片であるが、摩滅のため文様等は判らない。115は体部破片であり、半隆起線文が施されている。116は縄文の施された体部破片である。117は底部破片であり、底面が窪んでいる。

SK-36 (第15図118)

118は波状口縁の破片で、外面及び内面の口縁添いに縄文が施されている。外面の口縁部添いには縄文の施された隆帯が貼り付けられている。

SK-37 (第15図119)

119は口縁部の破片で、外面口縁端部添いに隆帯が貼り付けられている。

SK-39 (第15図120)

120は口縁部付近の破片で、隆帯が貼り付けられ、刺突文が入れられている。

SK-40 (第15図121・122)

121は口縁部付近の破片と思われる、半載竹管による押し引きの連続刺突文で区画が描かれている。122は口縁部付近の破片と思われる、半載竹管による半隆起線文？が入れられている。

SK-42 (第15図123)

123は体部破片であり、縄文地に半載竹管による半隆起線文が入れられている。

S K-43 (第15図124)

124は体部破片であり、弧状に肥厚された端部に連続して刻目が入れている。

S K-45 (第15図125)

125は体部破片であり、半截竹管文と連続刺突文が入れている。

S K-48 (第15図126)

126は体部破片であり、縄文地に半截竹管による半隆起線文が入れている。

S K-50 (第15図127)

127はやや内湾する口縁部の破片である。外面は摩滅のため不鮮明だが縄文が施されていたものと思われ、刺突文が入れている。口縁端部には連続して刻目が入れている。

S K-51 (第15図128)

128は体部破片であり、縄文地に半截竹管による連続爪形文が横位に入れられ、その上には連続爪形文付隆帯がみられる。

S K-52 (第15図129・130)

129は口縁部付近の破片と思われ、半截竹管による連続爪形文とその下に刺突文がみられる。130は体部破片で、半截竹管による半隆起線文が施されている。

S K-53 (第15図131)

131は波状口縁の破片である。口縁に添って連続刺突文が3列入れられている。口端部にも連続刻目が入れている。

S K-54 (第15図132)

132は体部破片であり、隆帯が貼り付けられ、その下に刺突文が入れている。

S K-55 (第15図133)

133は口縁部破片である。口縁部は波状で端部は面をなして内側に張り出す。縄文は外面及び端部に施文されている。

S K-56 (第15図134)

134は体部破片であり、縄文が施されている。

SK-57 (第15図135~138)

135は内湾する口縁部の破片である。口縁には突起が付き、突起部には刺突文が入れられている。136は縁部のある口縁部付近の破片であり、縄文が施されている。137は体部破片であり、半載竹管によって格子文が入れられている。138は口縁部破片である。内面は肥厚されている。外面には連続刺突文が入れられ、その下には半載竹管で施文されている。

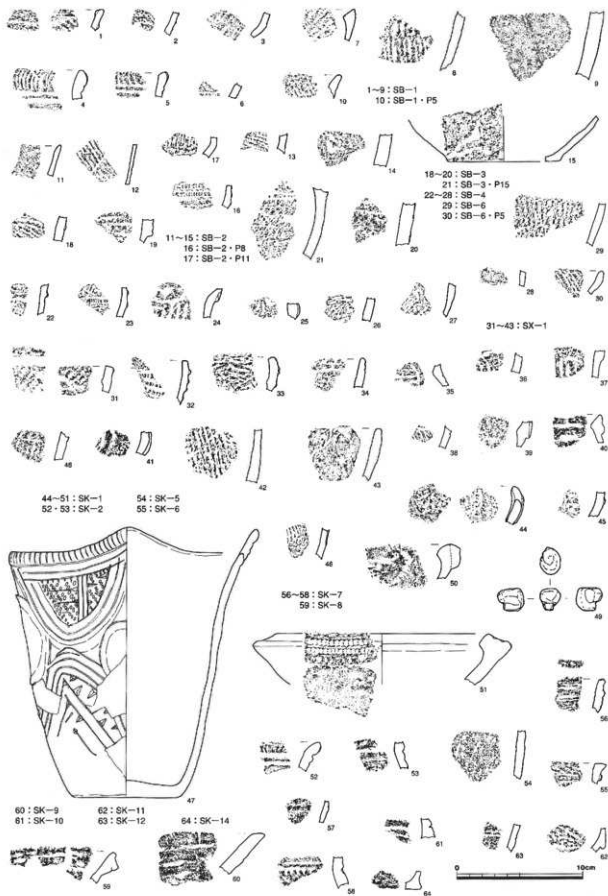
古墳内黒灰色砂質土層 (第15図139~155)

139は波状の口縁部破片である。口唇部は肥厚されて面をもち、連続刺突文が入れられている。外面には素文の細い隆帯が口縁添いに貼り付けられている。140は細い素文の隆帯が貼り付けられている体部破片である。141は口縁部破片であり、口唇部に縄文が施され、外面には半載竹管によって施文されている。142は口縁部破片であり、半載竹管文が施文されている。143は口縁部破片であり、半載竹管による連続爪形文が3条施されている。144・146は体部破片であり、隆帯と半載竹管による半隆起線文が施されている。145は体部破片であり、横位と縦位に隆帯が貼り付けられている。147は剥離しているが隆帯が1条貼り付けられていたようで、その下に半載竹管による半隆起線文が施されている。148・149は口縁部破片であり、148の口唇添いには刺突文が入れられている。150は口縁部破片であり、外面には隆帯が貼り付けられ、隆帯上部をハイガイによる連続押圧、隆帯下部は連続爪形文が施されている。内面には縄文が施文されている。151は体部破片であり、縄文が施されている。152は体部破片であり、貼り付けられた隆帯添いに連続刺突文が入れられている。153・154は底部破片であり、接地面が張り出し、そこに刻目が巡らされている。155は底部破片であり、底から直に立ち上がっている。

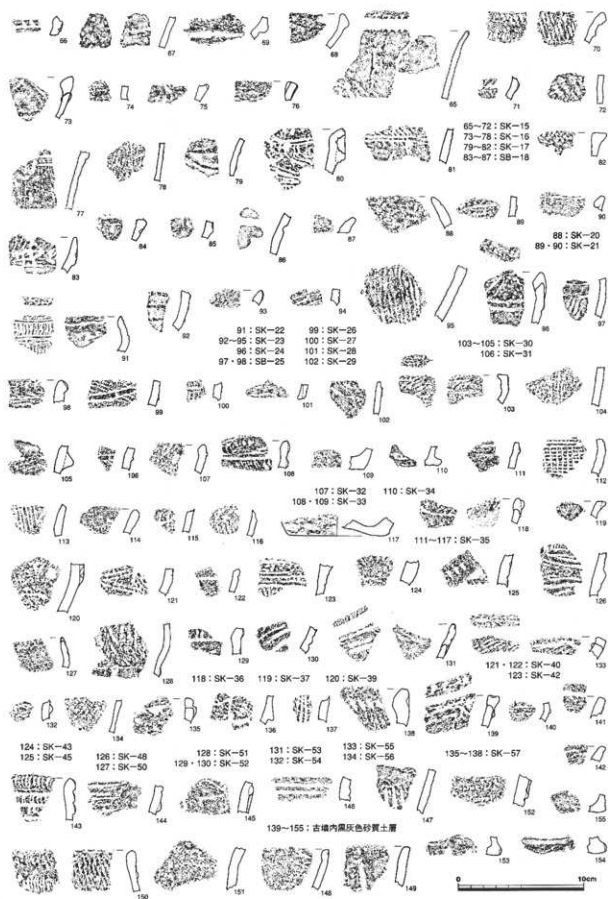
表土等 (第16図156~254)

156は口縁部破片である。外面には半載竹管による条線文が、端部には刻目が入れられている。157・158は体部破片であり、半載竹管による条線文が施文されている。159は口縁部破片である。外面には連続爪形文が施された細い隆帯が2条貼り付けられている。端部は面をなし、刺突文が入れられている。内面には爪痕がみられる。160・161は体部破片であり、縄文地に連続刺突文が入れられた隆帯が貼り付けられている。162・163は連続爪形文が施された隆帯が数条貼り付けられた体部破片で、162は縄文地である。164は口縁部破片であり、端部は面をなして内側に張り出し、内面は肥厚されている。外面及び端部、内面肥厚部に縄文が施され、端部に連続刻目が入れられている。165は口縁部破片であり、口縁内側に面をなす。外面には刻目の入れられた細い隆帯が縄文地に貼り付けられている。166は口縁部破片であり、口縁端部は面をなす。外面には刻目の入れられた細い隆帯が貼り付けられている。167はやや内湾する口縁部破片であり、縄文地に細い隆帯が貼り付けられている。168・169は刻目の入れられた細い隆帯が貼り付けられた体部破片である。170は口縁部破片で、端部よりやや下に連続爪形文が施文されている。171は口縁部破片で、端部よりやや下に連続爪形文が施文された隆帯が貼り付けられている。172~180は口縁部破片であり、口縁端部に連続爪形文が施文され、その下には半載竹管による半隆起線文が施されている。181~183は半載竹管による半隆起線文が施され

た口縁部破片である。184・185は半載竹管による連続爪形文が施された口縁部付近と思われる破片である。186～194は半載竹管によって横位に半隆起線文や沈線文が施された体部破片である。195は体部破片であり、横位に半隆起線文が施され、その上部に間隔を空けて連続刺突文が入れられている。196は縦位に半隆起線文が施された口縁部付近と思われる破片である。197・198は体部破片であり、半載竹管文を横位、縦位に施している。199は刻目の入れられた隆帯が貼り付けられた体部破片であり、隆帯下は半隆起線文が施されている。200は波状の口縁部破片であり、口縁から垂下する隆帯が貼り付けられ、口縁添いに半載竹管文を1条、その下に斜位に半載竹管文を施している。201は体部破片であり、縄文地に半隆起線文が施文されている。202は浅鉢の口縁部破片であり、口縁部内面には段を有し、外面には粘土を貼り付けて縁帯部を形成させている。縁帯部は上端部に半載竹管による連続爪形文を1条廻らし、その下には縄文を施して更に三角形印刻文を千鳥状に入れている。203は浅鉢の口縁部付近の破片と思われる、外面に粘土を貼り付けて縁帯部を形成させていたようである。縁帯下部には縄文が施され、その上に沈線文が入れられている。204は口縁部付近の破片と思われる、半載竹管によって横位に条線文が入れられている。205は粘土板による無文の区画文が貼り付けられた体部破片である。206は口縁部付近の破片と思われる、粘土貼り付けによる縁帯部が形成されていたようである。207は口縁部破片であり、口縁端部は無文で折り返され、その下には半載竹管で格子文が施されている。208・209は体部破片であり、半隆起線文で区画された内側に格子文が施されている。210・211は半載竹管による格子文が施された体部破片である。212は浅鉢の口縁部破片であり、口縁は肥厚されて内側に面を持つ。外面には半隆起線文が施され、そこに千鳥状に刺突文を入れている。213・214は体部破片であり、半隆起線文間に一列の刺突文を入れている。213には縄文がみられる。215は体部破片で、連続刺突文が入れられている。216・217は頸部破片で、刺突文が入れられている。218は体部破片で連続刺突文と半隆起線文が入れられている。219は波状をなす浅鉢の口縁部破片である。口縁端部は肥厚され、外面に弧状の連続爪形文が施されている。220は口縁部破片で、連続爪形文が施されている。221は体部破片であり、連続刺突文が入れられている。222・223は口縁部付近の破片であり、222は刻目付隆帯と縄文？が、223は連続爪形文がみられる。224は浅鉢の口縁部破片と思われる、端部は外方へ張り出して面をなす。225は深鉢の口縁部破片と思われる、端部は外方へ張り出して面をなし、沈線が入れている。226～228は無文の口縁部破片である。229は浅鉢の口縁部付近の破片と思われる、無文で端部付近は屈曲している。230は削痕？のある体部破片である。231は体部破片で、刻目の入れられた隆帯が1条貼り付けられている。232は体部破片で、縄文地に隆帯が1条貼り付けられている。233は縄文が施された口縁部破片で、端部に連続した刻目が入れられている。234は口縁部破片で、摩滅が著しいが外面と口唇部に縄文が施され、端部添いに細い隆帯が1条貼り付けられている。235～237は縄文の施された口縁部破片で、237の端部内面には刻目？が入れられている。238～245は縄文の施された体部破片である。246は無文の体部破片である。247は内湾する口縁部破片で、端部は内面に面をなす。端部添いに連続刺突文を、その下に沈線文をそれぞれ1条廻らし、沈線以下は縦位の連続刺突文で補填している。248・249は連続爪形文や連続刺突文の施された隆帯が縦位に貼り付けられた体部破片である。250～254は底部破片であり、250・253は底付近の側面に指押さえ痕が認められる。



第14図 縄文土器実測図一 (1/3)



第15図 縄文土器実測図-2 (1/3)



第16図 縄文土器実測図一3 (1/3)

第1表 縄文土器観察表

遺物 NO.	遺構	器種・分類	胎土	焼成	色調	文様・調整	備考	時期
14-1	SB-1	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	内外面縄文、隆帯、連続爪形文		大蔵山式
2	SB-1	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面縄文、隆帯、内面摩滅		十三番模式
3	SB-1	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面縄文、内面ナデ		大蔵山式?
4	SB-1	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面半隆起線文、連続爪形文、内面ナデ		山田平式
5	SB-1	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面半隆起線文、連続爪形文、内面ナデ		山田平式
6	SB-1	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面半隆起線文、縄文?、内面ナデ		諸磯式?
7	SB-1	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面縄文 (LR)、口唇縄文?、内面ナデ		船元Ⅱ式?
8	SB-1	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面縄文 (LR)、内面ナデ		船元式?
9	SB-1	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面沈線?、内面ナデ		勝安式系
10	SB-1-P5	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面縄文 (LR)、内面ナデ		山田平式
11	SB-2	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面貝殻刺突文、内面ナデ		清水ノ上Ⅱ式
12	SB-2	J 深鉢	密	良好	暗茶褐色	外面縄文 (RL)、内面ナデ		前期中葉
13	SB-2	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面縄文 (RL)、内面ナデ		前期~中期
14	SB-2	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面刺突文?、内面ナデ		新道式
15	SB-2	J 深鉢	密	良好	淡褐色	内外面ナデ、底径8.7cm、残存高3.7cm		前期~中期
16	SB-2-P8	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面隆帯、連続爪形文、縄文、内面ナデ		十三番模式
17	SB-2-P11	J 深鉢	密	良好	暗茶褐色	外面半隆起線文、内面ナデ		十三番模式
18	SB-3	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面隆帯、縄文 (RL)、内面ナデ		十三番模式
19	SB-3	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面連続爪形文、内面ナデ		十三番模式
20	SB-3	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面連続刺突文、内面ナデ		新道式
21	SB-3-P15	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面縄文、半隆起線文、内面ナデ		十三番模式?
22	SB-4	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面刻目隆帯、縄文 (LR)、内面ナデ?		北白川下層Ⅱc式
23	SB-4	J 深鉢	密	良好	暗赤褐色	外面隆帯、連続爪形文、縄文 (LR)、内面ナデ		大蔵山式
24	SB-4	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面半隆起線文、印刻文、内面ナデ		山田平式
25	SB-4	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面半隆起線文、内面ナデ		山田平式
26	SB-4	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面縄文?、内面ナデ		中期?
27	SB-4	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面縄文 (LR)、内面ナデ		前期~中期
28	SB-4	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面縄文?、内面ナデ		前期~中期
29	SB-6	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面縄文 (RL)、内面ナデ		船元式
30	SB-6-P5	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面集合沈線文、内面ナデ		五領ヶ台式?
31	SX-1	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面隆帯、縄文 (LR)、内面縄文、口唇部縄文		大蔵山式
32	SX-1	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面隆帯、連続爪形文、内面ナデ		十三番模式
33	SX-1	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面隆帯、縄文 (LR)、内面ナデ		十三番模式
34	SX-1	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面集合沈線文~半隆起線文、内面摩滅		五領ヶ台式
35	SX-1	J 深鉢	密	良好	灰褐色	外面半隆起線文、縄文、内面ナデ		北裏C式
36	SX-1	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面半隆起線文、内面ナデ		北裏C式
37	SX-1	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面半隆起線文、縄文、内面ナデ		北裏C式
38	SX-1	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面半隆起線文、内面ナデ		龍Ⅰ~Ⅱ期
39	SX-1	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面半隆起線文、内面ナデ		前期前葉~中葉
40	SX-1	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面半隆起線文、内面ナデ		北裏C式
41	SX-1	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面隆帯、内面ナデ		北裏C式
42	SX-1	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面縄文 (RL)、内面ナデ		船元式
43	SX-1	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面ナデ、内面ナデ		中期
44	SK-1	J 深鉢	密	良好	淡褐色	内外面爪形文付隆帯、外面集合沈線文、波状口縁		龍Ⅰ~Ⅱ期
45	SK-1	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面刻目隆帯、内面ナデ		船元Ⅱ式
46	SK-1	J 深鉢	密	良好	赤褐色	外面連続爪形文、内面ナデ		龍島式?
47	SK-1	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面半隆起線文、連続爪形文、印刻文、縄文 (RL)、内面ナデ、器高22cm、口径18cm、底径8.4cm		山田平式・五領ヶ台式の折衷様式
48	SK-1	J 深鉢	密	良好	赤褐色	外面集合沈線文、内面ナデ		五領ヶ台式
49	SK-1	J 深鉢	密	良好	橙褐色	突起、外面ナデ		前期前葉
50	SK-1	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面連続刺突文、突起、内面ナデ		勝Ⅰ式
51	SK-1	J 深鉢	密	良好	暗赤褐色	外面連続刺突文、刻目、内面ナデ		五領ヶ台式
52	SK-2	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面半隆起線文、連続爪形文、内面ナデ		山田平式
53	SK-2	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面半隆起線文、内面ナデ		山田平式
54	SK-5	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面縄文 (RL)、内面ナデ		中期
55	SK-6	J 深鉢	密	良好	淡赤褐色	外面爪形文付隆帯、縄文 (LR)、内面摩滅		十三番模式併行
56	SK-7	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面半隆起線文、口唇刻目、内面ナデ		十三番模式併行
57	SK-7	J 深鉢	やや粗	良好	暗茶褐色	外面爪形文付隆帯、内面ナデ		十三番模式
58	SK-7	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面半隆起線文、連続刺突文、内面ナデ		五領ヶ台式
59	SK-8	J 深鉢	密	良好	赤褐色	外面隆帯、内面ナデ		勝安式系
60	SK-9	J 深鉢	密	良好	茶褐色	内外面ナデ		前期前葉
61	SK-10	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面半隆起線文、内面ナデ		山田平式
62	SK-11	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面縄文 (LR)、内面ナデ		山田平式
63	SK-12	J 深鉢	密	良好	暗茶褐色	外面半隆起線文、内面ナデ		龍Ⅰ~Ⅱ期

遺物 NO.	遺構	器種・分類	胎土	焼成	色調	文様・調整	備考	時期
64	S K-14	J 深鉢	密	良好	橙褐色	内外面ナデ		前期後葉
15-65	S K-15	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面隆帯刺離痕、ナデ、口唇連続刻目、内面ナデ		中越式
66	S K-15	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面半隆起線文、刺突文、内面ナデ		北裏C式
67	S K-15	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面刺突文、内面条痕?		清水ノ上Ⅱ式
68	S K-15	J 深鉢	密	良好	茶褐色	内外面ナデ		北裏C式?
69	S K-15	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面連続爪形文?、内面ナデ		北裏C式
70	S K-15	J 深鉢	密	良好	赤茶褐色	外面ハイガイ押文、縄文 (RL)、内面縄文		船元Ⅱ式
71	S K-15	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面刻目隆帯、縄文、内面ナデ		船元Ⅱ式
72	S K-15	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面縄文 (RL)、内面ナデ		中期前葉
73	S K-16	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面貼付隆帯、縄文?、内面ナデ、波状口縁		山田Ⅰc新
74	S K-16	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面連続爪形文、縄文、内面ナデ		大歳山式
75	S K-16	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面刻目、刺突文、内面摩滅		中期前葉?
76	S K-16	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面縄文?、内面摩滅		中期前葉?
77	S K-16	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面半截竹管文、内面ナデ		北裏C式併行
78	S K-16	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面縄文 (LR)、内面ナデ		前期
79	S K-17	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面隆帯、内面ナデ		山田Ⅰc新
80	S K-17	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面半隆起線文、刺突文、内面ナデ		五領ヶ台式
81	S K-17	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面半截竹管文、内面ナデ		五領ヶ台式
82	S K-17	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面縄文?、内面ナデ		中期前葉
83	S K-18	J 深鉢	密	良好	淡橙褐色	外面縄文、半隆起線文、刺突文、内面ナデ		北裏C式
84	S K-18	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面半隆起線文、刺突文、内面ナデ		北裏C式
85	S K-18	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面半隆起線文、内面ナデ		北裏C式
86	S K-18	J 深鉢	密	良好	淡橙褐色	外面沈線、内面ナデ		中期
87	S K-18	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面ナデ、内面板ナデ痕		中期
88	S K-20	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面縄文、内面摩滅		中期前葉
89	S K-21	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面隆帯、縄文、内面ナデ		十三番提式
90	S K-21	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面ナデ?、内面摩滅		山田平式
91	S K-22	J 深鉢	密	良好	黒褐色	外面集合沈線文、刻目、内面ナデ		五領ヶ台式
92	S K-23	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面隆帯、内面ナデ		十三番提式
93	S K-23	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面連続爪形文、内面ナデ		北裏C式?
94	S K-23	J 深鉢	密	良好	淡橙褐色	外面集合沈線文、内面ナデ		五領ヶ台式
95	S K-23	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面縄文?、内面摩滅		船元式
96	S K-24	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面縄文、刻目隆帯、内面ナデ、波状口縁		山田Ⅰc新
97	S K-25	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面半截竹管文、縄文、内面ナデ		諸磯式?
98	S K-25	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面連続爪形文、半隆起線文、内面ナデ		五領ヶ台式
99	S K-26	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面隆帯、縄文 (RL)、内面ナデ		十三番提式
100	S K-27	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面半隆起線文、内面摩滅		五領ヶ台式
101	S K-28	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	内外面ナデ		山田平式
102	S K-29	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面隆帯、縄文?、内面摩滅		十三番提式
103	S K-30	J 深鉢	密	良好	淡褐色	内外面縄文 (LR)		大歳山式
104	S K-30	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面半隆起線文、内面ナデ		五領ヶ台式
105	S K-30	J 深鉢	密	良好	黒褐色	外面隆帯、内面ナデ		中期前葉?
106	S K-31	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面隆帯、縄文、内面ナデ		十三番提式
107	S K-32	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面隆帯、縄文?、内面ナデ		山田Ⅰc新
108	S K-33	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面連続爪形文、内面ナデ		北裏C式
109	S K-33	J 深鉢	密	良好	橙褐色	内外面摩滅		前期～中期
110	S K-34	J 深鉢	密	良好	暗褐色	内外面ナデ		前期中～後葉
111	S K-35	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面隆帯、縄文、内面ナデ		十三番提式?
112	S K-35	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面格子文、内面ナデ		五領ヶ台式
113	S K-35	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面集合沈線文、内面ナデ		五領ヶ台式
114	S K-35	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	内外面摩滅		中期前葉?
115	S K-35	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面半隆起線文、内面ナデ		五領ヶ台式?
116	S K-35	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面縄文 (RL)、内面板ナデ		船元式?
117	S K-35	J 深鉢	密	良好	淡褐色	内外面ナデ、窪み底		中期前葉?
118	S K-36	J 深鉢	やや粗	良好	淡褐色	外面隆帯、縄文、内面縄文		船元Ⅱ式
119	S K-37	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面隆帯、内面ナデ		五領ヶ台式?
120	S K-39	J 深鉢	やや粗	良好	黒褐色	外面隆帯、刺突文、摩滅、内面ナデ		藤内Ⅰ式
121	S K-40	J 深鉢	やや粗	良好	暗橙褐色	外面半截竹管刺突文、内面ナデ		山田Ⅰc新
122	S K-40	J 深鉢	やや粗	良好	暗橙褐色	外面半隆起線文?、内面ナデ		北裏C式
123	S K-42	J 深鉢	密	良好	暗灰褐色	外面半隆起線文、縄文、内面ナデ		北裏C式
124	S K-43	J 深鉢	密	良好	淡橙褐色	外面連続刻目、ナデ、内面ナデ		山田平式
125	S K-45	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面連続刺突文、内面ナデ		北裏C式
126	S K-48	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面半隆起線文、縄文、内面ナデ		北裏C式
127	S K-50	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面刺突文、縄文?、口唇刻目、内面ナデ、波状口縁		五領ヶ台式
128	S K-51	J 深鉢	やや粗	良好	淡橙褐色	外面隆帯、連続爪形文、縄文 (RL)、内面ナデ		船元Ⅱ式

遺物 NO.	遺構	器種・分類	胎土	焼成	色調	文様・調整	備考	時期
129		S K-52 J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面連続爪形文、刺突文、内面ナデ		五領ヶ台式
130		S K-52 J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面半陸起線文、刺突文、内面ナデ		北裏C式
131		S K-53 J 深鉢	密	良好	黒褐色	外面連続刺突文、口唇連続刻目、内面摩滅、波状口縁		前期?
132		S K-54 J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面隆帯、刺突文、内面ナデ		船元式?
133		S K-55 J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面縄文 (RL)、内面ナデ、波状口縁		大歳山式
134		S K-56 J 深鉢	密	良好	褐色	外面縄文 (RL)、内面ナデ		前期?
135		S K-57 J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面刺突文、突起、内面ナデ		五領ヶ台式
136		S K-57 J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面縄文、内面ナデ		山田平式
137		S K-57 J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面格子文、内面ナデ		五領ヶ台式
138		S K-57 J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面半截竹管文、刺突文、内面ナデ		五領ヶ台式
139		黒灰色砂土層 J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面隆帯、ナデ、口唇刺突文、内面ナデ、波状口縁		五領ヶ台式?
140		黒灰色砂土層 J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面隆帯、ナデ、内面摩滅		五領ヶ台式?
141		黒灰色砂土層 J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面半截竹管文、ナデ、口唇縄文、内面ナデ		五領ヶ台式?
142		黒灰色砂土層 J 深鉢	密	良好	橙赤褐色	外面半截竹管文、内面ナデ		五領ヶ台式?
143		黒灰色砂土層 J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面連続爪形文、内面ナデ		北裏C式
144		黒灰色砂土層 J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面隆帯、半陸起線文、内面ナデ		五領ヶ台式
145		黒灰色砂土層 J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面半陸起線文、内面ナデ		北裏C式
146		黒灰色砂土層 J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面半陸起線文、内面ナデ		山田平式
147		黒灰色砂土層 J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面半陸起線文、刺突文、内面ナデ		山田平式
148		黒灰色砂土層 J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面口唇付近刺突文、内面ナデ		中期前葉
149		黒灰色砂土層 J 深鉢	密	良好	淡褐色	内外面摩滅		中期前葉?
150		黒灰色砂土層 J 深鉢	密	良好	淡赤褐色	編織、ハレ断、縦線刻目、内面		船元式
151		黒灰色砂土層 J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面縄文 (RL)、内面摩滅		中期前葉?
152		黒灰色砂土層 J 深鉢	密	良好	淡赤褐色	外面隆帯、連続刺突文、内面ナデ		新道式
153		黒灰色砂土層 J 深鉢	密	良好	暗褐色	内外面ナデ、底部に刻目		前期後葉
154		黒灰色砂土層 J 深鉢	密	良好	淡赤褐色	内外面ナデ、底部に刻目		前期後葉
155		黒灰色砂土層 J 深鉢	密	良好	淡褐色	内外面摩滅		前期後葉
16-156	表土	J 深鉢	密	良好	淡黄褐色	外面半截竹管による条線文、端部刻目、内面摩滅		清水ノ上I式
157	墳丘内	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面半截竹管による条線文、内面摩滅		清水ノ上I式
158	表土	J 深鉢	密	良好	淡橙褐色	外面半截竹管による条線文、内面ナデ		清水ノ上I式
159	表土	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面隆帯、爪形文、口唇刺突文、内面爪痕		北白川下層田式
160	表土	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面連続刺突文付隆帯、縄文 (LR)、内面ナデ		北白川下層田式
161	表土	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面連続刺突文付隆帯、縄文 (LR)、内面ナデ		北白川下層田式
162	SB-12-P3	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面隆帯、連続爪形文、縄文、内面ナデ		北白川下層田式
163	表土	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面隆帯、連続爪形文、内面ナデ		北白川下層田式
164	表土	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面縄文、口唇部刻目、内面縄文		大歳山式
165	表土	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面刻目隆帯、縄文 (LR)、内面ナデ		北白川下層田式
166	表土	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面刻目隆帯、ナデ、内面ナデ		北白川下層田式
167	表土	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面隆帯、縄文 (LR)、内面ナデ		十三菩提式
168	表土	J 深鉢	密	良好	淡灰褐色	外面刻目隆帯、内面ナデ		北白川下層田式
169	SB-13-P9	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面刻目隆帯、内面ナデ		北白川下層田式
170	表土	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面連続爪形文、内面ナデ		北裏C式
171	土壌内	J 深鉢	密	良好	淡橙褐色	外面隆帯、連続爪形文、内面板ナデ		北裏C式
172	表土	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面連続爪形文、半陸起線文、内面摩滅		山田平式
173	表土	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面連続爪形文、半陸起線文、内面ナデ		山田平式
174	表土	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面連続爪形文、半陸起線文、内面摩滅		山田平式
175	表土	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面連続爪形文、半截竹管文、内面ナデ		北裏C式
176	表土	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面連続爪形文、半陸起線文、内面ナデ		山田平式
177	表土	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面連続爪形文、半陸起線文、内面摩滅		山田平式
178	S D-8	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面連続爪形文、半陸起線文、内面ナデ		山田平式
179	墳丘内	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面連続爪形文、半陸起線文、内面ナデ		山田平式
180	土壌内	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面連続爪形文、半陸起線文、内面摩滅		山田平式
181	墳丘内	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面半陸起線文、内面摩滅		山田平式
182	墳丘内	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面半陸起線文、内面摩滅		山田平式
183	表土	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面半陸起線文、内面摩滅		山田平式
184	土壌内	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面連続爪形文、半陸起線文、内面摩滅		山田平式
185	土壌内	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面連続爪形文、半陸起線文、内面摩滅		山田平式
186	SB-10-P3	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面半陸起線文、内面ナデ		山田平式
187	表土	J 深鉢	密	良好	暗茶褐色	外面半陸起線文、内面ナデ		五領ヶ台式
188	表土	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面半截竹管文、内面ナデ		北裏C式
189	表土	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面半陸起線文、内面板ナデ?		五領ヶ台式
190	表土	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面半陸起線文、内面摩滅		五領ヶ台式
191	表土	J 深鉢	密	良好	黒褐色	外面半陸起線文、内面ナデ		五領ヶ台式
192	表土	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面半截竹管文、内面ナデ		五領ヶ台式
193	表土	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面半截竹管文、内面ナデ		五領ヶ台式?

遺物 NO.	遺構	器種・分類	胎土	焼成	色調	文様・調整	備考	時期
194	表土	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面半隆起線文、内面ナデ		北裏C式
195	表土	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面半隆起線文、連続刺突文、内面ナデ?		五領ヶ台式
196	土壇内	J 深鉢	密	良好	黒褐色	外面半隆起線文、内面ナデ		山田平式
197	土壇内	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面半隆起線文、内面ナデ		清水ノ上I式
198	墳丘内	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面半截竹管文、内面ナデ		諸磯b-c式併行
199	表土	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面隆帯、半隆起線文、刻目、内面ナデ		北裏C式
200	墳丘内	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面隆帯、半截竹管文、内面摩滅、波状口縁		五領ヶ台式
201	表土	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面半隆起線文、縄文 (LR)、内面ナデ		五領ヶ台式
202	表土	J 浅鉢	密	良好	橙褐色	外面連続爪形文、刺突文、縄文 (RL)、内面ナデ		北裏C式
203	表土	J 浅鉢	密	良好	暗褐色	外面縄文、沈線、内面ナデ		北裏C式
204	土壇内	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面半截竹管による条線文、内面ナデ		中期?
205	表土	J 深鉢	やや粗	良好	暗赤褐色	外面粘土板貼付、内面ナデ		山田平式
206	墳丘内	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面粘土板貼付、内面摩滅		山田平式
207	表土	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面格子文、内面ナデ		五領ヶ台式
208	土壇内	J 深鉢	密	良好	赤褐色	外面格子文、内面ナデ		新道式
209	土壇内	J 深鉢	密	良好	赤褐色	外面格子文、内面ナデ		新道式
210	表土	J 深鉢	密	良好	赤褐色	外面格子文、内面ナデ		新道式
211	表土	J 深鉢	密	良好	赤褐色	外面格子文、内面ナデ		新道式
212	墳丘内	J 深鉢	やや粗	良好	淡茶褐色	外面半隆起線文、千鳥状刺突文、内面摩滅		五領ヶ台式
213	墳丘内	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面半隆起線文、連続刺突文、縄文、内面ナデ		北裏C式
214	表土	J 深鉢	密	良好	黒褐色	外面半隆起線文、連続刺突文、内面ナデ		五領ヶ台式
215	墳丘内	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面連続刺突文、内面摩滅		中期前葉
216	土壇内	J 深鉢	密	良好	淡橙褐色	外面刺突文、内面刺突		中期前葉
217	表土	J 深鉢	密	良好	暗赤褐色	外面刺突文、内面ナデ		中期前葉
218	表土	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面半隆起線文、連続刺突文、内面ナデ		北裏C式
219	表土	J 浅鉢	密	良好	茶褐色	外面続爪形文、内面ナデ、波状口縁		新道式
220	表土	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面連続爪形文、内面ナデ		北裏C式
221	表土	J 深鉢	やや粗	良好	橙褐色	外面連続刺突文、内面摩滅		新道式
222	土壇内	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面連続刻目付隆帯、縄文、内面ナデ		北山71cc?
223	表土	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面連続爪形文?、内面摩滅		北白川下層式?
224	SB-11-P1	J 鉢	やや粗	良好	橙褐色	外面ナデ?、内面ナデ		中期前葉
225	表土	J 深鉢	密	良好	赤褐色	外面江線、ナデ、内面ナデ		勝坂式系
226	表土	J 深鉢	やや粗	良好	茶褐色	内外面ナデ		中期前葉
227	土壇内	J 深鉢	密	良好	橙褐色	内外面ナデ?		中期前葉
228	土壇内	J 深鉢	密	良好	茶褐色	内外面ナデ		中期前葉
229	表土	J 浅鉢	密	良好	橙褐色	内外面ナデ		中期前葉
230	墳丘内	J 深鉢	密	良好	淡赤褐色	外面削痕?、内面ナデ		中期?
231	表土	J 深鉢	やや粗	良好	茶褐色	外面刻目隆帯、内面ミガキ		中期
232	表土	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面隆帯、縄文 (LR)、内面ナデ		十三菩提式?
233	表土	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面縄文 (LR)、口唇部刻目、内面ナデ		中期
234	表土	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面隆帯、縄文 (LR)、口唇部縄文、内面ナデ		大塚山式
235	SD-8	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面縄文、内面ナデ?		中期前葉
236	表土	J 深鉢	密	良好	褐色	外面縄文 (LR)、内面ナデ		中期前葉
237	SD-5	J 深鉢	密	良好	暗茶褐色	外面縄文、口唇部刻目?、内面ナデ		前期?
238	土壇内	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面縄文、内面ナデ		中期
239	表土	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面縄文、内面ナデ		中期
240	表土	J 深鉢	密	良好	暗茶褐色	外面縄文 (LR)、内面ナデ		前期
241	表土	J 深鉢	密	良好	淡褐色	外面縄文、内面ナデ		中期前葉
242	表土	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面縄文 (RL)、内面ナデ		船元式
243	表土	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面縄文 (RL)、内面ナデ		船元式
244	土壇内	J 深鉢	密	良好	暗褐色	外面縄文 (RL)、内面ナデ		船元式
245	表土	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	外面縄文 (RL)、内面ナデ		船元式
246	表土	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面削痕、内面ナデ		中期?
247	墳丘内	J 深鉢	密	良好	淡赤褐色	外面連続刺突文、沈線、内面摩滅		狭沢式
248	表土	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面隆帯、連続爪形文、内面ナデ		北裏C式?
249	周溝	J 深鉢	密	良好	淡赤褐色	外面隆帯、連続刺突文、内面ナデ		新道式
250	土壇内	J 深鉢	やや粗	良好	橙褐色	外面ナデ、指押さえ、内面ナデ、底面ナデ		前期末～中期初
251	SD-5	J 深鉢	密	良好	茶褐色	外面ナデ、内面ナデ		中期
252	表土	J 深鉢	やや粗	良好	茶褐色	内外面ナデ、底面未調整		前期末～中期
253	表土	J 深鉢	密	良好	橙褐色	外面ナデ、指押さえ、内面ナデ		前期末～中期
254	SB-11-P4	J 深鉢	密	良好	淡茶褐色	内外面ナデ、底面摩滅		中期前葉

* J—縄文土器 注量の単位はcm、()は残存数値。底径には、脚部径や台部径を含む。

B. 石器 (第17～19図・第2表)

石器では石鏃2点、石錐1点、剥片9点、打製石斧1点、磨製石斧2点、石刀2点、石錐4点、砥石1点、玉1点が出土している。ここでは石器を種類ごとに述べる。法量等は第2表参照。

石鏃 (第17図1・2)

1は茎があり基部が挟れる凹基有茎鏃である。平面形は二等辺三角形をなし、調整剥離は表裏に行っている。黒褐色砂質土層から出土している。2は基部を欠損するが、稜を有している。調整剥離は表裏に行われている。古墳墳丘内茶褐色砂質土層から出土。

石錐 (第17図3)

3は錐部を欠損している。つまみ状の頭部は平面形が三角形をなし、表裏に丁寧な調整剥離を行っている。SK-1出土。

剥片 (第17図4～12)

4～6は縁辺部の一部に使用痕と思われる微細で不規則な剥離が認められる剥片である。4は表土、5はE-5区内の土壌、6は表土から出土している。7は穿孔後に割れた剥片と思われ、半円形の窪みがみられる。E-7区内土壌から出土している。8～12も縁辺部の一部に使用痕と思われる微細で不規則な剥離が認められる剥片である。8はSK-20、9はSD-1、10はSB-5内土壌、11は表土、12は古墳内黒灰色砂質土層から出土。

打製石斧 (第18図13)

13は平面形が短冊形をなし、片面に自然の稜面を残している。身の反りは比較的少なく、刃部は丸い。調整加工は粗く、両側縁及び頭部に敲打して剥離させている。SB-3から出土。

磨製石斧 (第18図14・15)

14は石斧の頭部である。体部、刃部を欠損し、表面は磨かれているが、裏面は打ちかけている。断面形は楕円形をなすものと思われる。15は頭部、片側面、刃部を欠損している。体部には磨痕が認められる。14・15とも黒灰色砂質土層から出土している。

石刀 (第18図16・17)

16は体部破片であり、刃部側を欠損している。側面に短沈線による彫刻痕が認められる。古墳墳丘内淡茶褐色砂質土から出土している。17は直線的に延びる東部付近の破片と思われ、片側に鈍角であるが刃部を有す。剥離が著しいが、短沈線による彫刻痕が認められる。表土から出土。

石錐 (第19図18～21)

18は打欠石錘で、平面形が楕円形で扁平な礫の長軸両端を打ち欠いて縄掛け部を作っている。古墳周溝から出土している。19は小型の打欠石錘である。平面形は楕円形で扁平な礫の長軸両端を打ち欠いて縄掛け部を作っている。古墳内黒灰色砂質土層から出土している。20は小型の打欠石錘である。扁平な円礫の両端を打ち欠いて縄掛け部を作っている。古墳墳丘表土から出土。21は切目石錘と思われるもので片側の一部を欠損している。楕円形の礫の長軸端を揃り切って縄掛け部を作っている。古墳周溝から出土している。

砥石（第19図22）

22は平面形が隅丸長方形で片側に突出部を有し、断面は隅丸長方形である。表裏面に研磨するために研いだ痕跡が認められたため、砥石と判断した。SK-2から出土。

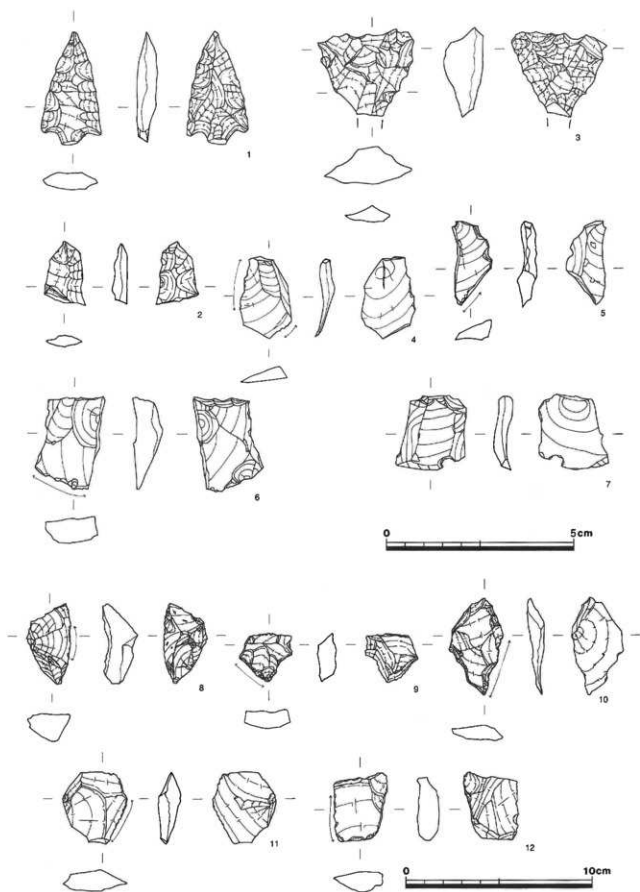
玉（第19図23）

23は径2cmほどの円柱状の石材を8mmほどの厚さで打ち割り、その平坦面に径6mmほどの孔を穿った円形の玉と思われるものである。両面や側面は研磨されずに打ち割られたままで、未完成品の可能性もある。黒灰色砂質土層から出土している。

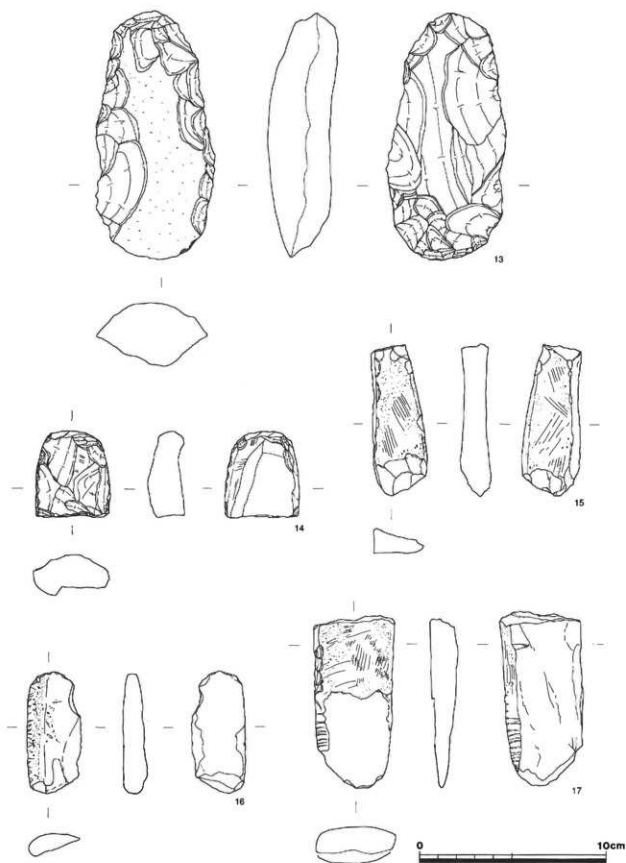
第2表 石器観察表

遺物 NO.	遺構等	器種・分類	長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	時期
17-1	古墳内黒灰色砂質土層	R 石錘	3.0	1.5	0.5	2.5	チャート		前期～中期？
2	古墳内茶褐色砂質土層	R 石錘	(1.6)	(0.9)	0.4	0.7	安山岩	基部欠損	前期～中期？
3	SK-1	R 石錘	(2.5)	2.6	1.1	4.6	安山岩		山田平式
4	表土	R 剥片	2.1	1.3	0.4	1.0	黒曜石	使用痕あり	前期～中期？
5	E-5 区土壌	R 剥片	2.3	1.0	0.5	0.8	黒曜石	使用痕あり	前期～中期？
6	表土	R 剥片	2.5	1.4	0.7	3.2	黒曜石	使用痕あり	前期～中期？
7	E-7 区土壌	R 剥片	2.0	1.6	0.3	1.6	黒曜石	穿孔あり	前期～中期？
8	SK-20	R 剥片	4.4	2.3	1.5	12.8	黒曜石	使用痕あり	中期
9	SD-1	R 剥片	2.6	2.9	8.5	6.6	チャート	使用痕あり	前期～中期？
10	SB-5 内土壌	R 剥片	5.2	2.7	0.8	7.8	頁岩	使用痕あり	前期～中期？
11	表土	R 剥片	4.0	3.5	1.2	10.9	頁岩	使用痕あり	前期～中期？
12	古墳内黒灰色砂質土層	R 剥片	3.8	2.8	1.2	13.0	チャート	使用痕あり	前期～中期？
13	SB-3	R 打製石斧	13.5	6.0	3.2	343	砂岩	自然面残る	北裏C式
14	古墳内黒灰色砂質土層	R 磨製石斧	(4.7)	(3.9)	(1.8)	50	塩基性岩	体部・刃部欠損	前期～中期？
15	古墳内黒灰色砂質土層	R 磨製石斧	(8.1)	(2.9)	(1.7)	56	塩基性岩	基部・体部欠損	前期～中期？
16	古墳内淡茶褐色砂質土層	R 石刀	(6.6)	(2.9)	(1.3)	38	塩基性岩	体部のみ	前期～中期？
17	表土	R 石刀	(9.4)	(4.3)	(1.4)	91	塩基性岩	体部のみ	前期～中期？
18	古墳周溝	R 石錘	7.6	5.8	1.4	87	砂岩		前期～中期？
19	古墳内黒灰色砂質土層	R 石錘	3.3	4.1	1.0	15	砂岩		前期～中期？
20	古墳墳丘表土	R 石錘	5.0	5.0	1.1	35	砂岩		前期～中期？
21	古墳周溝	R 石錘	(4.1)	4.0	1.1	18	砂岩		前期～中期？
22	SK-2	R 砥石	24.6	10.0	4.7	1721	砂岩		山田平式
23	古墳内黒灰色砂質土層	R 玉	2.2	2.0	0.8	4.9	チャート	孔径0.6	前期～中期？

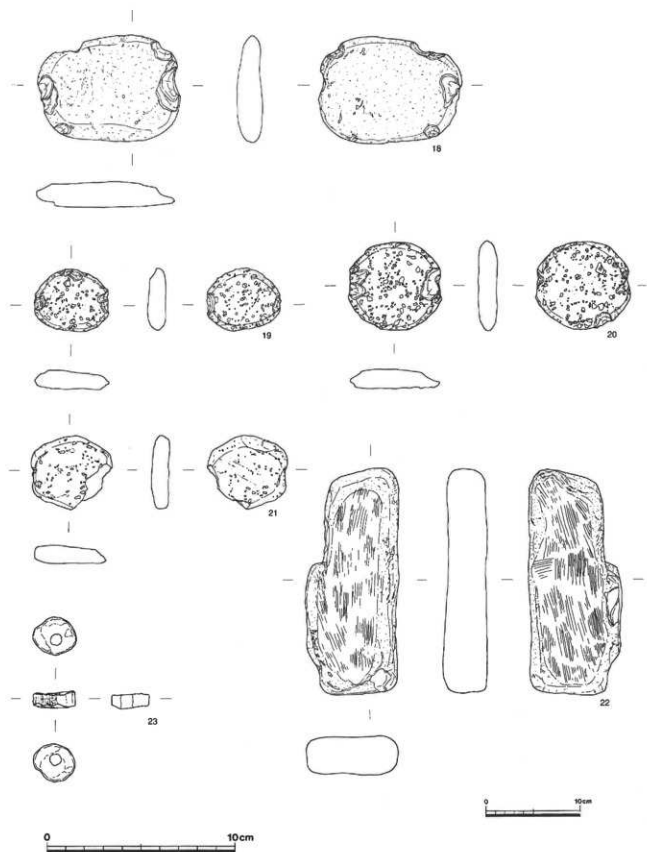
* R-石製品 注量の単位はcm、()は残存数値。



第17図 石器実測図一1 (1/1・1/2)



第18図 石器実測図-2 (1/2)



第19図 石器実測図-3 (1/2・1/4)

第4章 弥生時代以降の遺構・遺物

弥生時代以降の遺構は、掘立柱建物（SB）18棟、櫓（SA）2列、溝（SD）12条以上、土壇多数等が検出されている。ここでは各遺構を種類ごとに説明し、土壇に関しては遺物を出土したものを中心に記載する。なお、各遺構の規模等は検出面で測った数値であり、掘立柱建物、櫓の規模計測値は柱穴の中心間の測定値である。

1. 掘立柱建物（第20～24図）

掘立柱建物は、側柱建物が16棟、総柱建物が1棟、庇付側柱建物が1棟確認されている。この他に、柱穴と考えられる土壇も存在しており、18棟以上の建物があったものと思われる。

SB-7（第20図）

E-4・5区で検出された3間以上×2間の庇付側柱建物で、調査区外に延びている。主軸方位はN-9°-Eである。桁行の規模は4.3m、柱間隔は1.2m～1.6mであり、庇部は0.8m張り出している。梁間の規模は、柱間隔は1.7mである。柱穴は平面形が楕円形であり、規模は径25cm～52cm、深さは15cm～52cmと比較的小さい。

P7から土師器・台付甕の脚部が1点のみ出土しているが、建物の時期は中世以降の可能性が高い。

SB-8（第20図）

E・F-5区で検出された4間×3間の側柱建物である。主軸方位はN-52°-Wである。桁行の規模は3.9m、柱間隔は0.8m～1.2mであり、梁間の規模は3.4m、柱間隔は0.7～1.4mである。柱穴は平面形が楕円形か円形であり、規模は径28cm～48cm、深さは10cm～49cmと比較的小さい。

P10から縄文土器の細片が出土しているが、建物の時期は中世以降のものと思われる。

SB-9（第20図）

E・F-5区で検出された4間×1間以上の側柱建物で、調査区外へ延びている。主軸方位はN-44°-Wである。桁行の規模は5.2m、柱間隔は1.2m～1.6mであり、梁間の規模は3.7m以上、柱間隔は1.6m～2.0mと思われる。柱穴は平面形が楕円形か円形、不整形であり、規模は径28cm～36cm、深さは8cm～48cmと比較的小さい。

出土遺物は無いが、建物の時期は中世以降のものと思われる。

SB-10（第21図）

E-5・6・F-6区で検出された2間×1間の側柱建物である。主軸方位はN-43°-Eである。桁行の規模は5.2m、柱間隔は2.4m～2.6mであり、梁間の規模は2.8mと思われる。柱穴は平面形が楕

円形か不整形であり、規模は径80cm～132cm、深さは15cm～42cmと比較的大きい。

出土遺物は無いが、建物の時期は中世以降のものと思われる。

SB-11 (第20図)

E-6・F-6・7区で検出された4間×2間の側柱建物である。主軸方位はN-32°-Wである。桁行の規模は8.4m、柱間隔は1.6m～2.6mであり、梁間の規模は4.2m、柱間隔は2.1mである。柱穴は平面形が楕円形か円形、不整形であり、規模は径28cm～80cm、深さは6cm～33cmと様々である。

出土遺物は無いが、建物の時期は中世以降のものと思われる。

SB-12 (第21図)

E・F-6・7区で検出された3間×2間の総柱建物である。主軸方位はN-40°-Wである。桁行の規模は8.4m、柱間隔は2.8mであり、梁間の規模は5.6m、柱間隔は2.8mである。柱穴は平面形が隅丸方形か楕円形であり、規模は径68cm～102cm、深さは10cm～34cmと比較的大きい。ただ、P11・12はSB-3と重複しており、小さな掘方しか確認できなかった。

出土遺物はP1から磁器、P6から土師器・銅、P8から土師器・皿の小片が出土しており、建物の時期は近世のものと思われる。

SB-13 (第22図)

F・G-6・7区で検出された3間×3間の側柱建物で、一部は調査区外へ延びている。主軸方位はN-33°-Wである。桁行の規模は6.0m、柱間隔は1.8m～2.2mであり、梁間の規模は5.6m、柱間隔は1.7m～2.0mである。柱穴は平面形が円形か楕円形であり、規模は径40cm～68cm、深さは13cm～40cmと比較的小さい。

P1とP3から縄文土器の細片が出土しているが、建物の時期は中世以降のものと思われる。

SB-14 (第21図)

G-6区で検出された2間以上×2間の側柱建物で、一部は調査区外へ延びている。主軸方位はN-18°-Eである。桁行の規模は3.8m以上、柱間隔は1.6m～1.8m、梁間の規模は2.4m、柱間隔は1.2mと思われる。柱穴は平面形が円形か楕円形であり、規模は径28cm～60cm、深さは15cm～45cmである。

出土遺物は無いが、建物の時期は中世以降のものと思われる。

SB-15 (第21図)

G-6・H-6・7区で検出された5間×2間の側柱建物で、一部は調査区外へ延びている。主軸方位はN-41°-Wである。桁行の規模は9.8m、柱間隔は1.6m～2.0mであり、梁間の規模は2.8m、柱間隔は1.4mである。柱穴は平面形が円形か楕円形であり、規模は径27cm～104cm、深さは7cm～41cmと大小様々である。

出土遺物は無いが、建物の時期は中世以降のものと思われる。

SB-16 (第22図)

H-6・7区で検出された3間×1間以上の側柱建物で、一部は溝と重複して調査区外へ延びている。主軸方位はN-40°-Wである。桁行の規模は7.8m、柱間隔は2.2m~2.8mであり、梁間の規模は6.6m以上、柱間隔は3.2mである。柱穴は平面形が円形か不整形であり、規模は径60cm~136cm、深さは11cm~44cmである。

P2・P3から縄文土器の碎片が出土しているが、建物の時期は中世以降のものと思われる。

SB-17 (第23図)

G・H-7・8区で検出された3間×2間の側柱建物である。主軸方位はN-48°-Wである。桁行の規模は6.4m、柱間隔は2.0m~2.4mであり、梁間の規模は4.4m、柱間隔は2.0m~2.6mである。柱穴は平面形が円形か双円形、不整形であり、規模は径72cm~121cm、深さは15cm~55cmである。

出土遺物は無いが、建物の時期は中世以降のものと思われる。

SB-18 (第23図)

G・H-8区で検出された2間以上×1間以上の側柱建物で、大半は調査区外へ延びている。主軸方位はN-90°-Wである。桁行の規模は3.0m以上、柱間隔は1.2mであり、梁間の規模は2.8m以上、柱間隔は1.7mである。柱穴は平面形が楕円形であり、規模は径40cm~64cm、深さは5cm~35cmである。

出土遺物は無いが、建物の時期は中世以降のものと思われる。

SB-19 (第22図)

G-9区で検出された3間×1間以上の側柱建物と思われ、大半は調査区外へ延びている。主軸方位はN-54°-Wである。桁行の規模は4.9m、柱間隔は1.4m~1.8mであり、梁間の規模は0.8m以上と思われる。柱穴は平面形が楕円形であり、規模は径37cm~48cm、深さは10cm~29cmである。

出土遺物はP1から土師器・皿の碎片が出土しており、建物の時期は中世以降のものと思われる。

SB-20 (第23図)

H-10区で検出された1間以上×1間以上の側柱建物と思われ、一部は調査区外へ延びている。主軸方位はN-3°-Wである。桁行の規模は2.5m以上、柱間隔は2.0mであり、梁間の規模は3.8m以上、柱間隔は2.0mである。柱穴は平面形が楕円形であり、規模は径43cm~67cm、深さは17cm~39cmである。

出土遺物は無いが、建物の時期は中世以降のものと思われる。

SB-21 (第23図)

H・I-10区で検出された3間×1間以上の側柱建物と思われ、大半は調査区外へ延びている。主軸方位はN-59°-Wである。桁行の規模は5.8m、柱間隔は1.8m~2.2mであり、梁間の規模は0.4

m以上と思われる。柱穴は平面形が円形か楕円形、不整形であり、規模は径48cm～108cm、深さは16cm～37cmである。

出土遺物は無いが、建物の時期は中世以降のものと思われる。

SB-22 (第22図)

H・I-10区で検出された3間×1間以上の側柱建物で、大半は調査区外へ延びている。主軸方位はN-54°-Wである。桁行の規模は5.7m、柱間隔は1.8m～2.0mであり、梁間の規模は2.0m以上、柱間隔は1.4m～1.8mである。柱穴は平面形が楕円形であり、規模は径38cm～64cm、深さは11cm～32cmである。

出土遺物は無いが、建物の時期は中世以降のものと思われる。

SB-23 (第23図)

J-10・11・K-10区で検出された2間以上×2間の側柱建物と思われ、大半は調査区外へ延びている。主軸方位はN-45°-Wである。桁行の規模は4.0m以上、柱間隔は1.6m～1.8mであり、梁間の規模は4.8m、柱間隔は2.4mである。柱穴は平面形が円形か楕円形であり、規模は径28cm～60cm、深さは10cm～24cmである。

出土遺物は無いが、建物の時期は中世以降のものと思われる。

SB-24 (第24図)

K-9・10・L-10区で検出された2間以上×1間以上の側柱建物と思われ、大半は調査区外へ延びている。主軸方位はN-57°-Eである。桁行の規模は5.6m以上、柱間隔は2.4m～2.6mであり、梁間の規模は2.8m以上、柱間隔は2.8mである。柱穴は平面形が円形か楕円形であり、規模は径48cm～56cm、深さは13cm～15cmである。

出土遺物は無いが、建物の時期は中世以降のものと思われる。

2. 柵 (第24図)

柱穴が数基並ぶものがあり、建物とならないため柵とした。2列が確認されている。

SA-1 (第24図)

E-5・6区で検出された5間の柵である。主軸方位はN-50°-Eである。規模は8.4m、柱間隔は1.4m～2.4mである。柱穴は平面形が楕円形であり、規模は径35cm～48cm、深さは14cm～44cmである。

出土遺物は無いが、柵の時期は中世以降のものと思われる。

SA-2 (第24図)

E・F-5区で検出された3間の櫓である。主軸方位はN-42°-Eである。規模は5.4m、柱間隔は1.7m~1.8mである。柱穴は平面形が楕円形または円形であり、規模は径40cm~56cm、深さは17cm~22cmである。

出土遺物は無いが、建物の時期は中世以降のものと思われる。

3. 不明遺構 (第24図)

調査区内では比較的規模が大きくて浅い土壌が検出されている。この土壌からは焼土・炭などがまわって出土している。性格が不明なため、この遺構を不明遺構(SX)として区別した。

SX-2 (第24図)

G-8区で検出された不明遺構である。平面形は隅丸方形に近いが、南西部で掘り込みが確認できなかった。規模は長軸2.4m、短軸2.2mである。遺構壁面は比較的緩やかであり、深さは7~23cmと比較的浅い。床面は平坦である。遺構内には16cm~24cm大の6基の小規模土壌がある。土壌の埋土は暗灰褐色砂質土層であり、焼土と炭が多く出ている。

出土遺物には中世陶器・碗があり、このことから遺構は12世紀中葉のものと思われる。

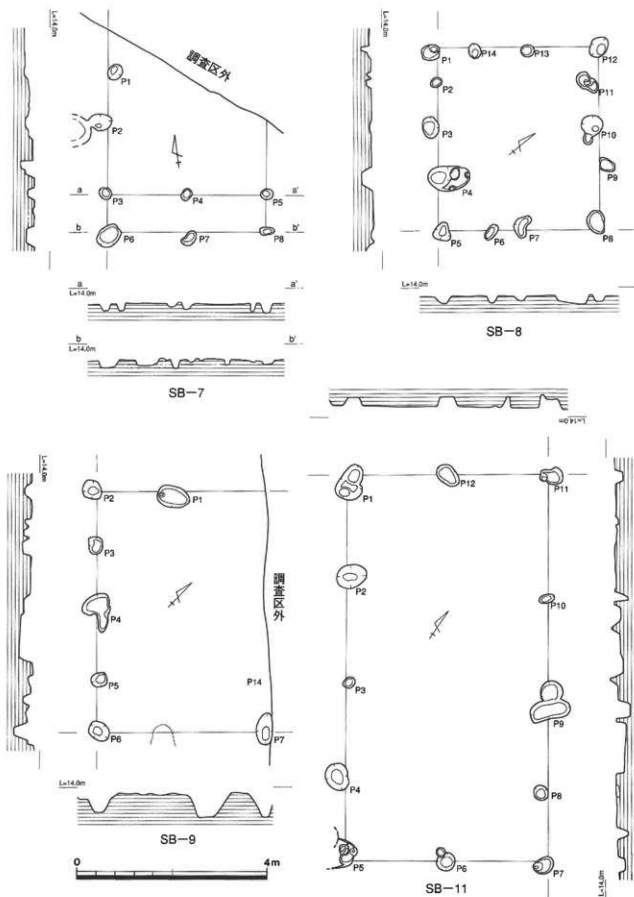
4. 火葬墓 (第24・28図)

調査区内では火葬墓が3箇所検出されている。これらの火葬墓からは炭などとともに焼人骨が出土している。周辺には同規模な土壌が検出されているが、炭や焼人骨は出土していない。ここでは、炭や焼人骨の出土した土壌のみを火葬墓と扱い説明する。

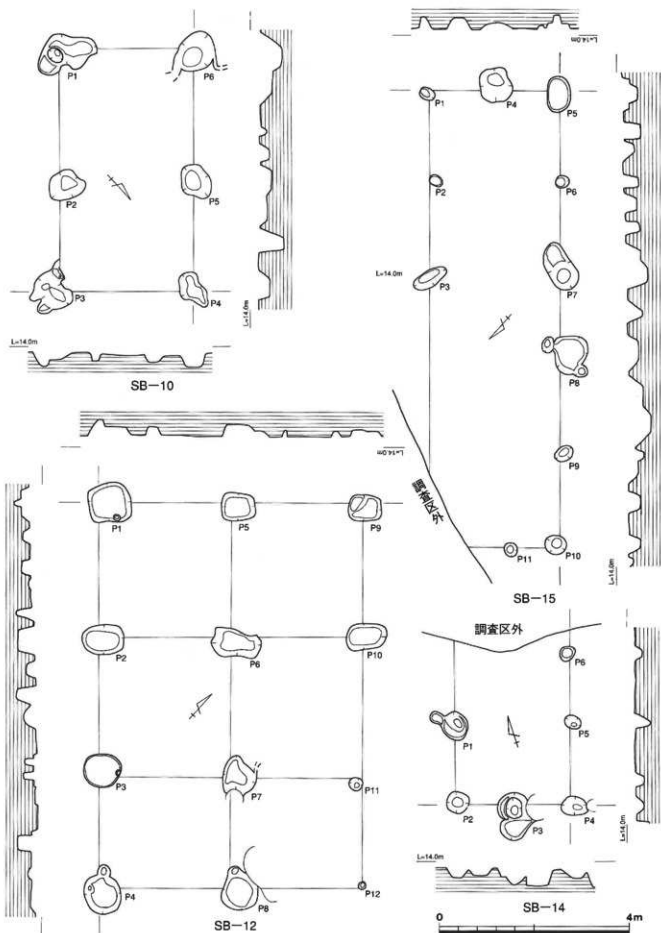
SZ-1 (第24・28図)

E-6区で検出された火葬墓である。平面形は隅丸長方形に近く、規模は長軸106cm、短軸80cmである。遺構壁面は垂直に近く、床面は平坦で深さは34cm~37cmである。床面から20cm程に茶褐色砂質土を入れて平坦にし、そこに18cm~35cm大の礫を10cmぐらいの間隔で3個ずつ2列に並べている。全ての礫は強く焼けて赤化しており、火葬を行う際の棺台であったものと思われる。火葬墓の中央付近には炭が径20cmの範囲にある。炭化材はクスノキであった。焼人骨は全体に散在しており、一部に比較的大きな破片や集中部が確認された。中央部の炭範囲内に六道銭が、礫上に土師器・皿が3個体出土したが、これらは焼けていないことから、火葬終了後に入れられたものと考えられる。火葬墓の埋土は暗灰褐色砂質土である。

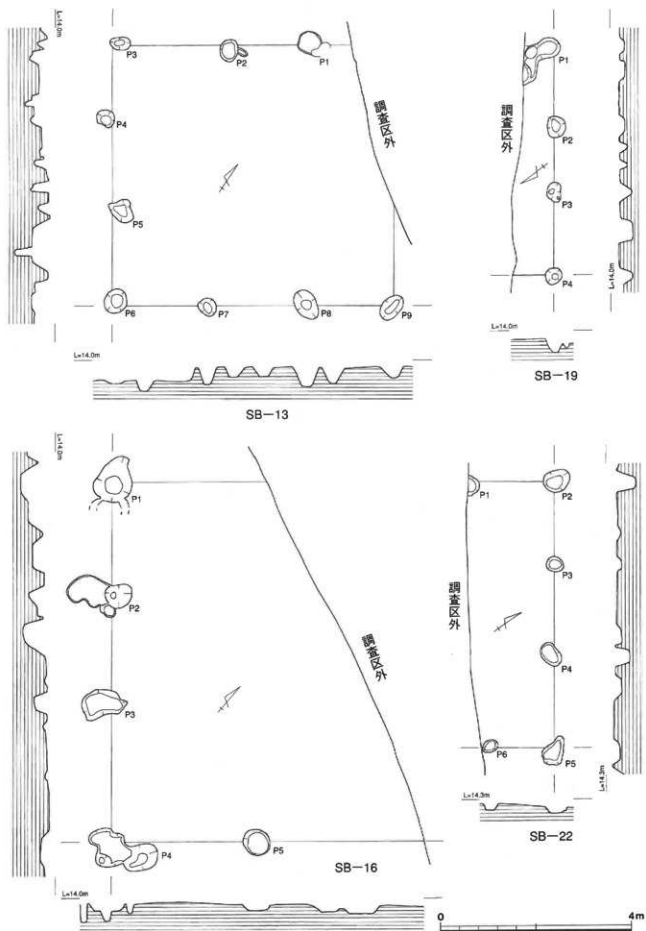
出土遺物には土師器・皿、銭貨があり、このことから火葬墓は中世~近世のものと思われ、年代測定では1470-1640 calADという数値が出ている。



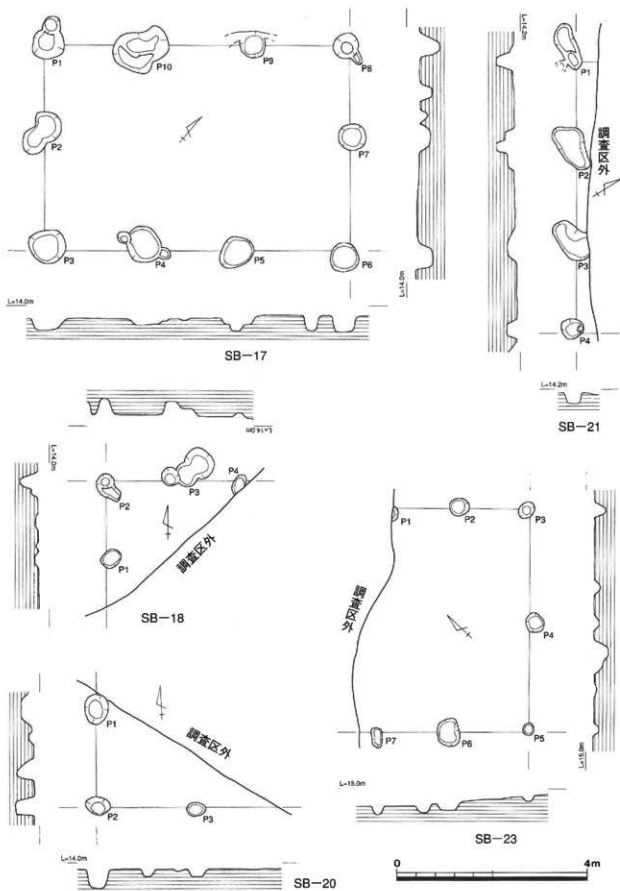
第20図 弥生時代以降遺構実測図-1 (1/80)



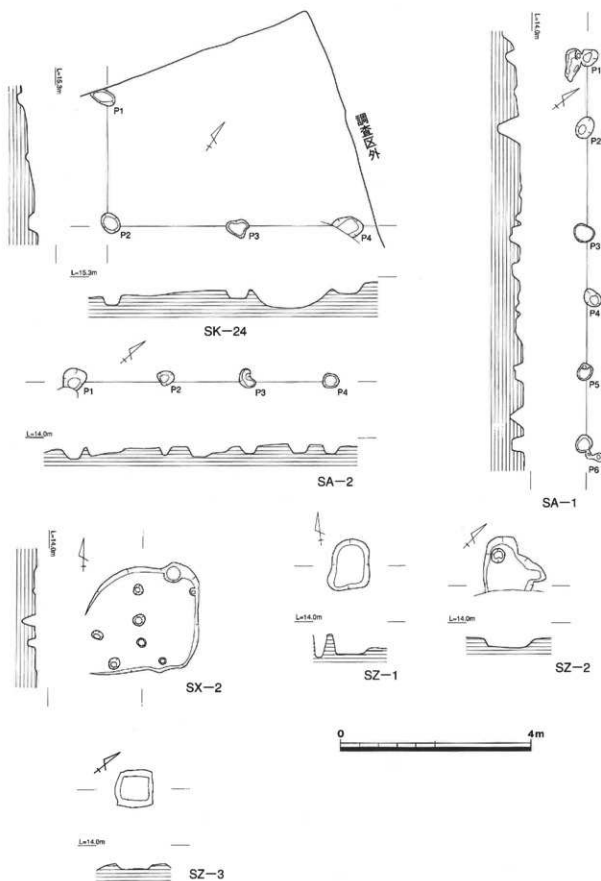
第21図 弥生時代以降遺構実測図-2 (1/80)



第22図 弥生時代以降遺構実測図-3 (1/80)



第23図 弥生時代以降遺構実測図—4 (1/80)



第24図 弥生時代以降遺構実測図-5 (1/80)

SZ-2 (第24・28図)

E-6区で検出された火葬墓である。平面形は不整形で、一部を他の土壌で欠いている。規模は長軸116cm以上、短軸130cmである。遺構壁面は緩やかで、床面は比較的平坦で深さは16cm～20cmである。床面には20cm大の2個の礫が27cm離れた位置に並べられている。礫は火を受けているようであるが、肉眼では判別は難しい。炭は全体的に散在して出土している。炭化材はシイノキ属、タケ亜科であった。焼骨は全体に散在しており、一部に比較的大きな破片や集中部が確認された。火葬墓の埋土は暗灰褐色砂質土である。

出土遺物には古代の土師器・甕が1点ある。しかし、火葬墓は中世～近世のものと思われ、年代測定では1550～1640 calADという数値が出ている。

SZ-3 (第24図)

E-5区の墳丘に掘り込まれていた火葬墓である。平面形は方形で、規模は一辺が80cm四方である。床面は比較的平坦で深さは12cmである。焼骨は部分的に散在していた。火葬墓の埋土は茶褐色砂質土である。

出土遺物は無いが隣接のSD-6から銭貨が出土しており、火葬墓を壊した際の遺物と考えられる。火葬墓の時期は中世～近世のものと思われる。

5. 溝 (第25・26図)

溝は、古墳の周溝を除くと12条以上が確認されている。

SD-1 (第25・28図)

E・F-5・6区で検出された溝で、逆コ字状に区画されて調査区外へ延びている。溝の北東側はSD-2と重複している。溝は一辺が11.7m×10.0m以上の範囲で逆コ字状に巡っている。溝の最大幅は1.0m、溝の床面は平坦で深さは16cm～28cmである。幅は比較的一定であるが、深さは北側の方が浅い。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には須恵器・甕、灰釉陶器・碗、中世陶器・小皿・壺、陶器・土瓶、九瓦、銭貨などがある。このうち溝の西角部で古墳周溝と重複する部分から焼人骨、中世陶器・壺、瓦破片、礫が並んで出土している(第28図)。これは中世の火葬墓が壊され、SD-1に投棄されたによるものと考えられる。出土遺物から、溝の時期は19世紀のものと思われる。

SD-2 (第25図)

E-4・5・F-5・6区で検出された溝で、北西～南東に調査区外から比較的直線的に延びており、SD-1と重複するが前後関係は把握できていない。直線状に延びた溝は最大幅0.8m、深さ13cm～33cm、検出長13.8mで直角に折れて調査区外へ続く。屈曲部からは更に細い溝が検出長4.2m、最大幅0.4m、深さ15cm前後で延びている。床面は比較的平坦である。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には須恵器・甕、陶器・碗・壺・鉢・灯明皿、土師器・鍋、銭貨などがあり、溝の時期は19世紀のものと思われる。

SD-3 (第6図)

D・E-5区で検出された溝で、古墳北東側の墳裾に重複して調査区外へ延びている。規模は検出長5.8m、最大幅0.9m、溝の床面は平坦で、深さは最大で15cmである。溝は幅や深さが比較的定まっている。溝の南端はSD-1・4に壊されている。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器・壺、銭貨があり、溝の時期は13～14世紀頃のものと思われる。

SD-4 (第6図)

D・E-5・6区で検出された溝で、古墳南東側の墳裾に重複して延びている。溝の両端はSD-1・5で壊されている。規模は検出長7.7m、最大幅1.0m以上、溝の床面は平坦で、深さは14～24cmである。埋土は灰褐色砂質土である。出土遺物は無く、溝の時期は不明である。

SD-5 (第6図)

D・E-5・6区で検出された溝で、墳丘近くにL字形に直角に曲がって調査区外へ延びている。溝は南北方向へ7.0m延び、更に直角に屈曲して12.2m続いている。溝の最大幅1.6m、溝の床面は平坦で、深さは17cm～20cmで、北東端ほど深くなっている。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物は無く、時期は不明である。

SD-6 (第26図)

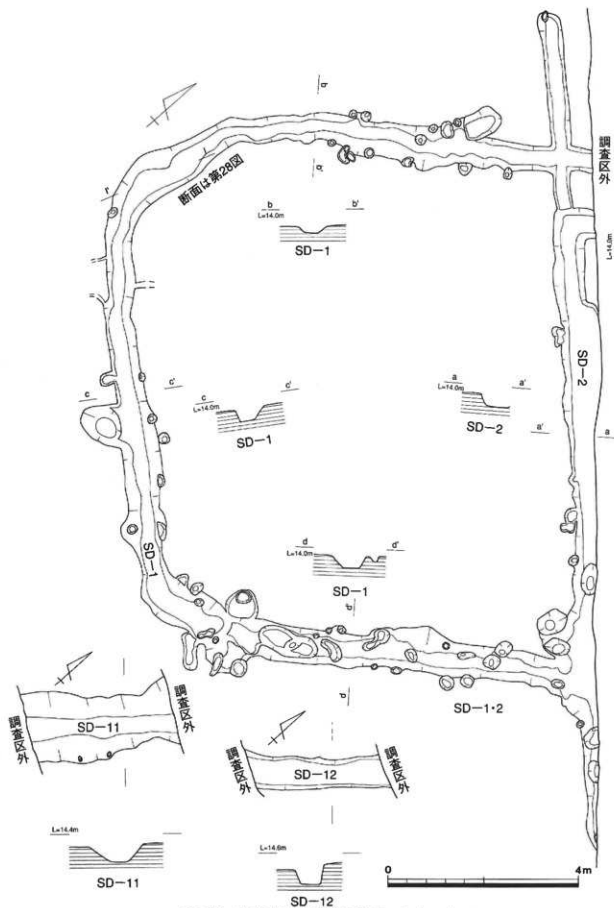
F-7・8・G-7区で検出された溝で、北東-南西方向に緩やかに湾曲して調査区外へ延びている。溝の端はSB-4・SX-1などと重複している。規模は検出長14.0m、最大幅0.8m、溝の床面は平坦で、深さは8cm～32cmである。溝の幅は比較的一定で、深さは北西端が深い。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器・碗があり、溝の時期は13世紀前葉と思われる。

SD-7 (第26図)

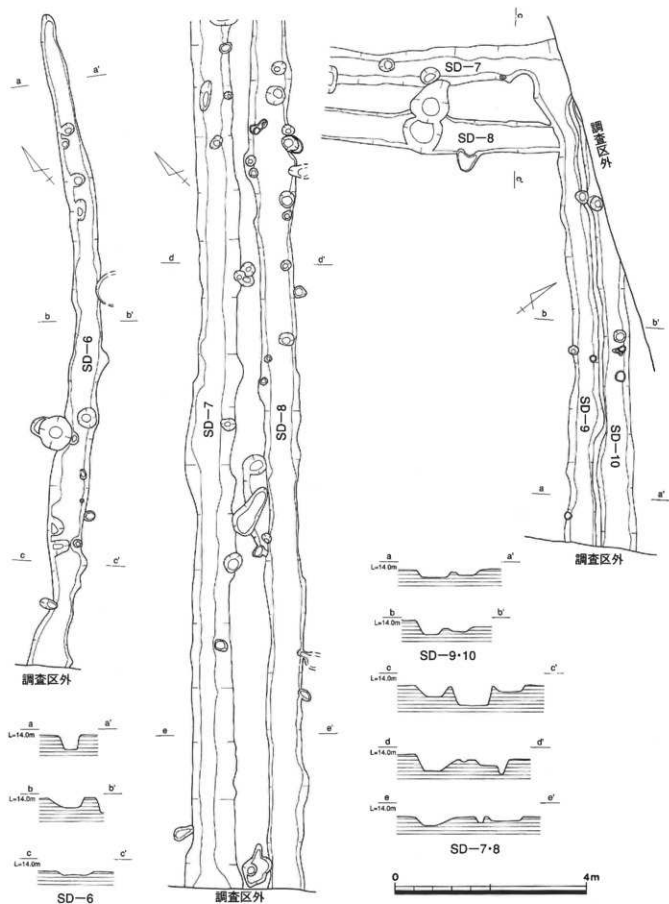
F-8・G-6・7・H-6区で検出された溝で、北東-南西方向へ直線的に調査区外へ延びている。規模は検出長23.8m、最大幅1.0m、溝の床面は平坦で、深さは20cm～28cmである。溝の幅は比較的一定で、深さは北東部が深い。埋土は暗灰褐色砂質土である。SB-4・5、SX-1を壊し、SD-9と重複しているが、両溝の前後関係はわかっていない。出土遺物には中世陶器・碗・鉢・小皿、陶器・碗・甕があり、時期は19世紀前葉と考えられる。

SD-8 (第26図)

F-8・G-7・8・H-6・7区で検出された溝で、SD-7と平行して北東-南西方向へ直線的に調査区外へ延びている。規模は検出長24.4m、最大幅1.0m、溝の床面は平坦で、深さは12cm～40cmである。溝の幅は比較的一定で、深さは北東部が深い。埋土は暗灰褐色砂質土である。SB-5、SX-1を壊し、SD-9と重複しているが、両溝の前後関係はわかっていない。出土遺物には陶器・皿があり、時期は16世紀前葉と考えられる。



第25図 弥生時代以降遺構実測図—6 (1/80)



第26図 弥生時代以降遺構実測図-7 (1/80)

SD-9 (第26図)

H-6・7区で検出された溝で、SD-7と重なって北西-南東方向へ直線的に調査区外へ延びている。規模は検出長10.8m、最大幅0.7m、溝の床面は平坦で、深さは16cm~24cmである。溝の幅、深さは比較的一定である。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には陶器・碗があり、時期は19世紀後葉と考えられる。

SD-10 (第26図)

H-6・7区で検出された溝で、SD-9と平行して北西-南東方向へ直線的に調査区外へ延びている。規模は検出長9.6m、最大幅0.8m、溝の床面は平坦で、深さは15cmである。溝の幅、深さは比較的一定である。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物は無く、時期は不明である。

SD-11 (第25図)

I-10区で検出された溝で、北北東-南南西方向へ直線的に調査区外へ延びている。規模は検出長3.0m、最大幅1.4m、溝の床面は平坦で、深さは35cmである。溝の幅は1.0m~1.4mと差があるが、深さは比較的一定である。埋土は黒灰色砂質土である。出土遺物は陶器・碗・播鉢、土師器・鍋があり、時期は18世紀後葉である。

SD-12 (第25図)

I・J-10・11区で検出された溝で、北北東-南南西方向へ直線的に調査区外へ延びている。規模は検出長2.8m、最大幅0.7m、溝の床面は平坦で、深さは40cmである。溝の幅や深さは比較的一定である。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物は無く、時期は不明である。

6. 土壌 (第27図)

土壌は、検出長4mを越える巨大な土壌をはじめ、柱穴状の小さなものまで、様々な形態のものが調査区全体から多数検出されている。また、風倒木痕も数カ所で確認されている。ここでは、弥生時代以降の遺物が出土している土壌を中心に述べるものとする。

SK-58 (第27図)

D-5区の墳丘内で検出された土壌である。平面形は楕円形で、規模は長径28cm、短径24cm、深さは41cmである。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には土師器・皿があり、時期は中世のものと思われる。

SK-59 (第27図)

D・E-5区の墳丘内で検出された土壌で、平面形は舟形、規模は長径3.0m、短径1.2m、深さは41cmである。埋土は茶灰色砂質土である。出土遺物には中世陶器・碗があり、時期は13世紀のもの

と思われる。

SK-60 (第27図)

E-5区で検出された土壌で、平面形はく字形、規模は長径99cm、短径32cm、深さは22cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器・碗があり、時期は12～13世紀のものと思われる。

SK-61 (第27図)

F-5区で検出された端部が方形な溝状の土壌であり、2基以上の土壌が重複している可能性がある。規模は長径2.6m、短径0.8m、深さは13cmである。埋土は暗灰発色砂質土である。出土遺物には中世陶器・碗があり、時期は12世紀前葉と思われる。

SK-62 (第27図)

D-6区の古墳周溝内で検出された土壌で、一部を調査区外で欠く。平面形は楕円形と思われ、規模は長径32cm、深さは56cmである。埋土は黒灰色砂質土である。古墳周溝に伴う土壌の可能性がある。出土遺物には土師器・高杯があり、時期は古墳時代中期神明式期である。

SK-63 (第27図)

D-6区の墳丘内で検出された土壌で、平面形はほぼ円形、規模は径15cm、深さは22cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物は陶器・仏飯器などがあり、時期は18世紀である。

SK-64 (第27図)

D-6区で検出された土壌で、平面形はほぼ円形、規模は径20cm、深さは26cmである。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には土師器・甕があり、時期は古墳～古代のものと思われる。

SK-65 (第27図)

E-6区で検出された土壌である。平面形は方形に近く、規模は径32cm、深さは40cmである。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物は中世陶器・小皿があり、時期は12世紀中葉と思われる。

SK-66 (第27図)

E-6区で検出された土壌で、平面形は楕円形、規模は長径40cm、短径32cm、深さは16cmである。埋土は黒灰色砂質土である。出土遺物には土師器・碗があり、時期は中世と思われる。

SK-67 (第27図)

F-6区で検出された土壌で、SB-4と重複している。平面形は楕円形で、規模は長径43cm、短径25cm、深さは24cmである。埋土は黒灰色砂質土である。出土遺物には灰釉陶器・碗があり、土壌の時期は11～12世紀と思われる。

SK-68 (第27図)

G-6区で検出された土壌で、平面形は長方形に近く、規模は長径35cm、短径28cm、深さは36cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物は無く、土壌の時期は不明である。

SK-69 (第27図)

G-6区で検出された土壌で、平面形は楕円形で、規模は長径28cm、短径24cm、深さは29cmである。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器・碗などがあり、時期は12世紀中葉と思われる。

SK-70 (第14図)

F-7区で検出された土壌で、平面形は帆立貝形に近く、規模は長径60cm、短径44cm、深さは61cmである。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器・碗があり、時期は13世紀中葉と思われる。

SK-71 (第27図)

F-7区で検出された土壌で、平面形は双円形、規模は長径84cm、短径48cm、深さは61cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器・碗があり、時期は12世紀のものと思われる。

SK-72 (第27図)

F-7区で検出された2段に掘り込まれた土壌で、平面形は楕円形、規模は長径82cm、短径60cm、深さは最大35cmである。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器・碗があり、時期は13世紀後葉と思われる。

SK-73 (第27図)

F-8区で検出された土壌で、SX-1を掘り込んでいる。平面形は楕円形、規模は長径41cm、短径36cm、深さは最大48cmである。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には須恵器・甕があり、時期は古代と思われる。

SK-74 (第27図)

G-8区で検出された土壌で、平面形は円形、規模は径15cm、深さは最大16cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物は無く、時期は不明である。

SK-75 (第27図)

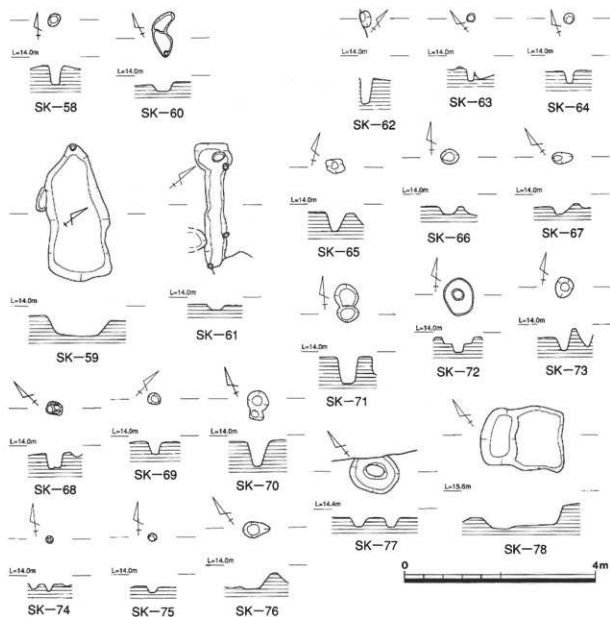
G-8区で検出された土壌で、平面形は円形、規模は径18cm、深さは最大12cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には土師器・皿があり、時期は中世と思われる。

SK-76 (第27図)

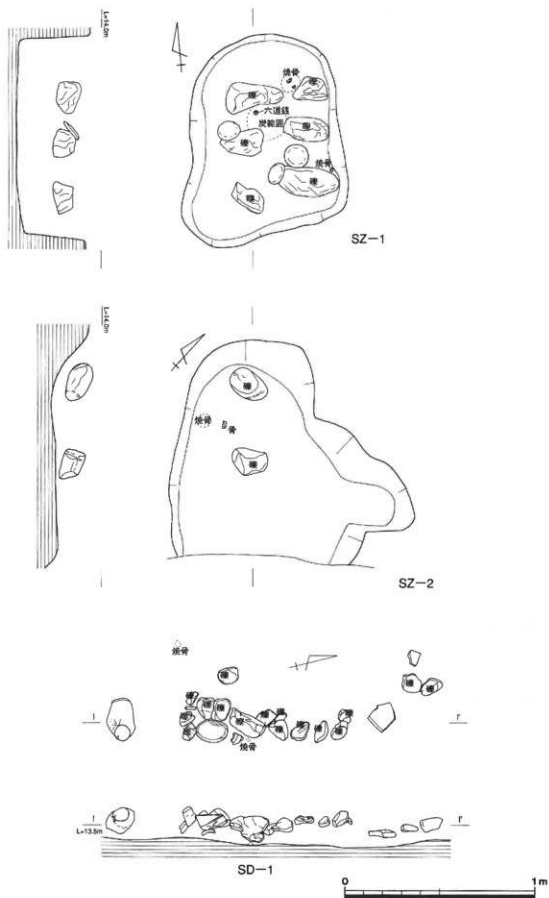
H-10区で検出された土壌で、平面形は楕円形、規模は長径58cm、短径34cm、深さは最大35cmである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には土師器・皿があり、時期は中世と思われる。

SK-77 (第27図)

I-10区で検出された土壌で、中央を残して環状に掘られている。平面形は楕円形、規模は長径104cm、短径84cm以上、深さは最大20cmである。埋土は灰褐色砂質土である。出土遺物には土師器・皿があり、時期は中世と思われる。



第27図 弥生時代以降遺構実測図-8 (1/80)



第28図 弥生時代以降遺物出土状況図 (1/20)

SK-78 (第27図)

K-10区で検出された土壌で、平面形は長方形に近く、規模は長径172cm、短径136cm、床面は2段になっており、深さは最大36cmである。埋土は赤褐色砂質土である。出土遺物には陶器・鉢があり、時期は17世紀中葉と思われる。

7. 遺物 (第29～32図、第3表)

今回の調査で出土した弥生時代以降の遺物には、須恵器、灰釉陶器、中世陶器、陶器、磁器、土師器、瓦などがコンテナ箱(34×54×20cm)に6箱程出土したのみであった。量的には中世～近世の土器が中心である。以下、遺構ごとに遺物を説明する。なお、遺物についての細かな調整・法量・時期等は第3表の観察表に記している。

SB-7 (第29図1)

1はP1から出土した土師器・台付甕の台部破片である。台部はハ字状をなし、接地部はやや肥厚されて丸い。調整は摩滅のため不明である。

SD-1 (第29図2～9・第32図85)

2は須恵器・甕の体部破片である。外面にタタキメ、内面に同心円文がみられる。3は灰釉陶器・碗である。口縁部はやや内湾気味に開き、端部付近で外方に曲げられる。調整は内外面回転ナデである。4は中世陶器・小皿の底部破片である。無高台の底部であり、調整は内外面回転ナデ、底面に糸切り痕が認められる。5は中世陶器・壺である。口縁部はやや外傾し、端部が若干肥厚されて縁帯部をなしている。頸部から肩部にかけて大きく湾曲しながら広がり、肩部から底部にかけては窄まっている。肩部には三条の沈線列と蓮弁文が入れられている。調整は内外面回転ナデ、板ナデ、底部はケズリである。蔵骨器として用いられたものである。6は陶器・急須である。注口部・底部を欠損しているが、体部は強く膨らんで口縁部で窄まる。把手穴が2箇所付く。調整は、外面は回転ナデで底部付近は回転ヘラケズリ、鉄軸がみられ、内面は回転ヘラケズリである。7は瓦製の人形頭部である。型取りされており、表裏両面に男性の顔が付けられている。8・9は丸瓦の破片である。85は銭貨である。文字は潰れてよく判らない。

SD-2 (第30図10～15・第32図86・87)

10は須恵器・甕の体部破片である。外面にタタキメ、内面に板ナデがみられる。11は陶器・碗であり、高台部を欠損している。いわゆる腰脛で口縁部は直立して端部は丸い。体部には一条の沈線が入れている。調整は内面回転ナデ、外面回転ナデ、回転ヘラケズリで、灰釉が施軸されている。12は陶器・壺蓋である。口縁部は強く屈折してやや下がり、端部は丸い。内面中央に芯受けがある。調整は内面回転ナデ、外面回転ナデ、回転ヘラケズリで、内面に鉄軸がかかる。13は陶器・鉢である。擂鉢と思われる、口縁端部は肥厚されている。調整は内外面回転ナデで、鉄軸がかけられている。14は陶器・壺

である。口縁部は強く外反し、端部が肥厚されて上面に面をなしている。頸部から肩部にかけて大きく湾曲しながら広がっている。調整は内面回転ナデ、外面回転ナデ、板ナデである。15は土師器・銅の口縁部破片である。口縁部は内湾し、端部はナデ窪む。調整は内面板ナデ、外面はナデ、指押さえて煤が付着している。86・87は銭貨である。87は永楽通宝である。

SD-3 (第30図16・17・第32図88~90)

16は中世陶器・碗である。口縁部は直線的で、端部は厚く面をなす。調整は内外面回転ナデである。17は灰釉陶器・壺の底部破片である。底部には高台が貼り付けられている。調整は内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリである。88~90は銭貨である。88は明道元寶である。89は摩滅のため不明。90は皇宋通寶である。

SD-6 (第30図18・19)

18・19は中世陶器・碗である。18は口縁部破片で、口縁部は直線的で、端部は尖る。調整は内外面回転ナデである。19は底部破片で、底部には高台が貼り付けられている。調整は内外面回転ナデ、底部に糸切り痕が認められる。

SD-7 (第30図20~24)

20は中世陶器・碗である。底部破片であり、高台が貼り付けられている。調整は内外面回転ナデ、底部に糸切り痕が認められる。21は中世陶器・鉢の底部破片である。底部には高台が貼り付けられている。調整は内面板ナデ、外面回転ヘラケズリである。22は陶器・碗であり、いわゆる腰折碗で口縁部は直立して端部は丸い。調整は内外面回転ナデ、底部は削り出し高台である。呉須絵がみられる。23は陶器・皿である。口縁部は外反して端部は肥厚されている。調整は内外面回転ナデ、長石釉がかかる。24は陶器・甕である。口縁部付近の破片で、調整は内外面回転ナデである。

SD-8 (第30図25)

25は陶器・皿である。口縁部は内湾し、端部は丸い。底部は削り出されている。調整は内外面回転ナデ、底部は回転ヘラケズリである。

SD-9 (第30図26)

26は陶器・碗である。いわゆる広東碗の底部で、底部は削り出し高台である。調整は内外面回転ナデ、底部削り出し高台、呉須絵がみられる。

SD-11 (第30図27~31)

27は中世陶器・碗である。底部破片で、底部には高台が貼り付けられ、高台には砂痕が認められる。調整は内外面回転ナデ、底部に糸切り痕が認められる。28・29は陶器・碗である。28はいわゆる丸碗で、口縁部は直立して端部は丸い。底部は削り出し高台である。調整は内外面回転ナデ、底部は回転ヘラ

ケズリで、灰釉が施釉されている。29はいわゆる丸碗で口縁部は直立して端部は丸い。底部を欠損している。調整は内面回転ナデで、呉須絵がみられる。30は陶器・播鉢である。口縁部は屈曲して縁帯を形成し、端部は丸い。内面にクシメが入れられている。調整は内面回転ナデ、外面回転ナデ、回転ヘラケズリで、鉄釉がかけられている。31は土師器・鍋である。いわゆる内耳鍋で、口縁部は内湾し、端部はナデ窪む。調整は内面板ナデ、外面はナデ、指押さえて煤が付着している。

SX-2 (第30図32)

32は中世陶器・碗である。底部破片で、底部には高台が貼り付けられている。調整は内外面回転ナデ、底部に糸切り痕が認められる。

SZ-1 (第30図33～35・第32図79～84)

33～35は土師器・皿である。比較的扁平の大きな皿で、口縁部は真っ直ぐ延びて端部は丸い。調整は内面板ナデ、外面ナデ、指押さえてある。79～84は銭貨である。79は咸平元寶、80は熙寧元寶、81は政和通寶であり、その他のものは文字が潰れて判読できない。

SZ-2 (第30図36)

36は土師器・甕である。口縁部は強く外反し、端部は尖る。調整は摩滅のため不明である。

SK-58 (第30図37)

37は土師器・皿である。比較的器高が高い皿で、口縁部は外反して端部は丸い。調整は内面ナデ、外面ナデ、指押さえてある。

SK-59 (第30図38)

38は中世陶器・碗である。口縁部は直線的で、端部はやや尖る。調整は内外面回転ナデである。

SK-60 (第30図39)

39は中世陶器・碗である。口縁部は端部付近で外反し、端部は丸い。調整は内外面回転ナデである。

SK-61 (第30図40)

40は中世陶器・碗である。底部破片で、底部には高台が貼り付けられている。調整は内外面回転ナデであり、底部には糸切り痕が認められる。

SK-63 (第30図41・42)

41は灰釉陶器・碗である。口縁部は端部付近で外反し、端部は丸い。調整は内外面回転ナデである。42は陶器・仏飯器である。口縁部はほぼ直立し、脚部は強く開く。調整は内外面回転ナデであり、呉須絵がみられる。

SK-64 (第30図43)

43は土師器・甕である。口縁部は強く外反し、端部は尖る。調整は外面ハケメ、内面は摩滅のため不明である。

SK-65 (第30図44)

44は中世陶器・小皿である。内湾する口縁部で端部は丸い。調整は内外面回転ナデである。

SK-66 (第30図45)

45は土師器・碗である。底部破片で、底部には細い高台が貼り付けられている。調整は内外面回転ナデで、底部はナデである。

SK-67 (第30図46・47)

46・47は灰釉陶器・碗である。口縁部は端部付近で外反し、端部は丸い。調整は内外面回転ナデである。外面に輪花と灰釉が認められる。

SK-69 (第30図48)

48は中世陶器・碗である。口縁部を欠き、体部は膨らみ、底部には高台が貼り付けられている。高台には砂痕が認められる。調整は内外面回転ナデであり、底部には糸切り痕が認められる。

SK-70 (第30図49)

49は中世陶器・碗である。口縁部は真っ直ぐ延び、端部は丸い。調整は内外面回転ナデである。

SK-71 (第30図50)

50は中世陶器・碗である。口縁部は端部付近で外反し、端部は丸い。調整は内外面回転ナデである。

SK-72 (第31図51)

51は中世陶器・碗である。口縁部は真っ直ぐ延び、端部は丸い。調整は内外面回転ナデである。

SK-75 (第31図52)

52は土師器・皿である。小型の皿で、口縁部は内湾して端部は丸い。調整は内面ナデ、外面ナデ、指押さえてある。

SK-76 (第31図53)

53は土師器・皿である。口縁部は内湾して端部は丸い。調整は内面ナデ、外面ナデ、指押さえてある。

SK-77 (第31図54)

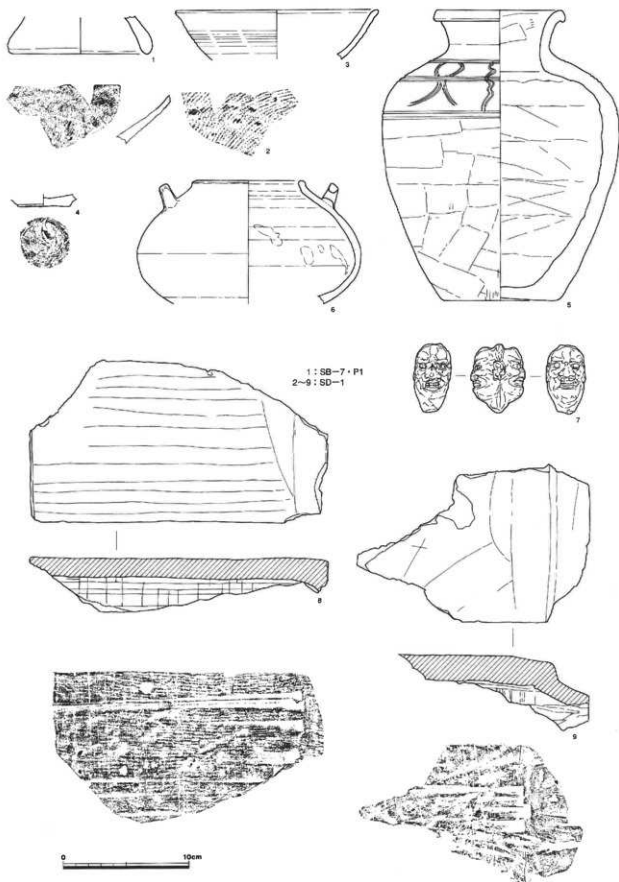
54は土師器・皿である。口縁部は内湾して端部は丸い。調整は内面板ナデ、外面ナデ、指押さえである。

SK-78 (第31図55)

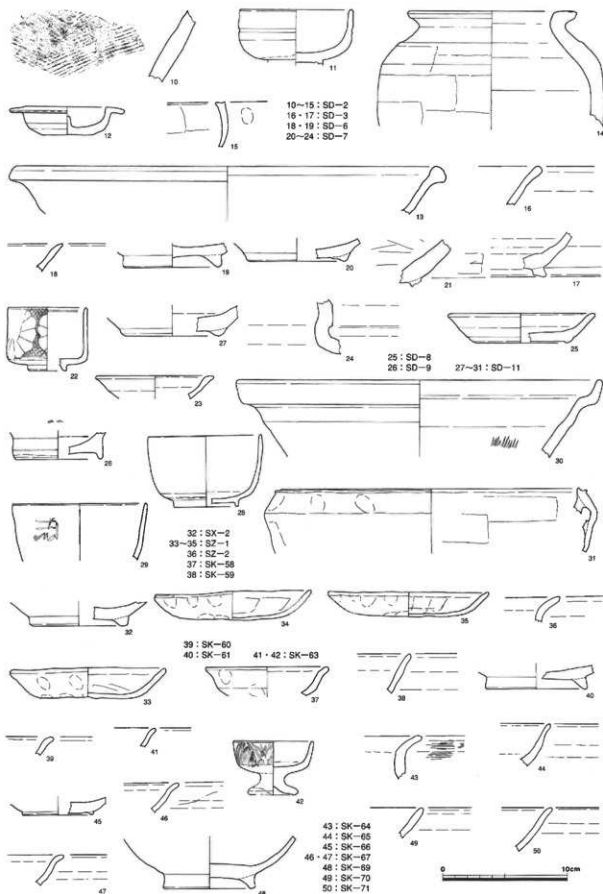
55は陶器・鉢である。口縁部は外反して端部はやや肥厚されている。内面に沈線による波状文が入れている。調整は内外面回転ナデで、灰釉がかかっている。

表土等 (第31図56~78・第32図91・92)

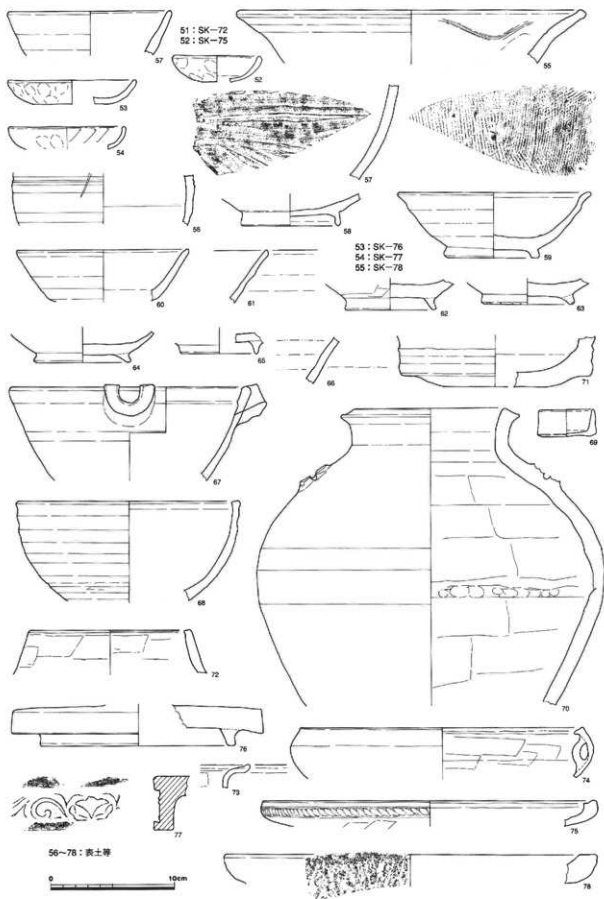
56は須恵器・壺の体部破片である。体部に2条の沈線が入れられている。調整は内外面回転ナデである。57は須恵器・甕の体部破片である。外面にタタキメ、内面に板ナデがみられる。58は灰軸陶器・皿である。底部破片であり、底部には薄い高台が貼り付けられている。調整は内外面回転ナデであり、底部は回転ヘラケズリである。59~65は中世陶器・碗である。59は口縁部は端部付近で外反し、端部は丸い。底部には砂痕のある高台が貼り付けられている。調整は内外面回転ナデ、底部に糸切り痕が認められる。60・61は口縁部破片で、口縁部は直線的で、端部は尖る。調整は内外面回転ナデである。62~65は底部破片で、底部には高台が貼り付けられている。63の高台には初殻痕が認められる。調整は内外面回転ナデ、底部に糸切り痕が認められる。66は陶器・碗である。天目茶碗の体部破片と思われる。調整は内外面回転ナデで、鉄釉がかけられている。67は陶器・片口鉢である。口縁部は真っ直ぐ立ち上がり、端部は内面が肥厚されている。径2cm程の注口部が貼り付けられている。調整は内外面回転ナデであり、灰釉がかけられている。68は陶器・鉢である。口縁部はやや内湾し、端部は面をなす。調整は内面回転ナデ、外面は口縁部付近は回転ナデ、それ以下は回転ヘラケズリである。鉄釉がかけられている。69は陶器・猪口である。口縁部は直立し、端部は丸い。底部は平坦である。調整は内外面回転ナデで、底部は回転ヘラケズリである。灰釉がかかっている。70は陶器・壺である。茶壺と思われる。口縁部はやや外傾し、端部が若干肥厚されて面をなしている。頸部から肩部にかけて大きく湾曲しながら広がり、肩部から底部にかけては窄まっている。肩部には耳が付けられていたようである。調整は内面板ナデ、指押さえ、外面は回転ナデ、回転ヘラケズリである。71は陶器・オサの底部破片と思われる。体部は直立し、底部は膨らんでいる。調整は内外面回転ナデで、底部には布目痕が認められる。72は土師器・釜の口縁部である。口縁はやや内傾し、端部は面をなす。調整は内外面板ナデである。73~75は土師器・鍋である。73はいわゆる伊勢型ナベであり、口縁部は強く外反し、端部は折り返されている。調整は内面板ナデ、外面ナデである。74は内耳鍋で、口縁部は内湾し、端部は面をなして内側に張り出す。調整は内面板ナデで、外面はナデで煤が付着している。75はほうろく鍋で、口縁部は短く屈曲し、端部はナデ窪み内面が肥厚されている。肩部に連続した浮文が施されている。調整は内面ナデ、外面板ナデである。76は瓦製品の蓋と思われるものである。円盤の下面に台部が付けられている。外面には摘みが付いていたようである。77は軒平瓦である。瓦当面には唐草文と花が細線で表現されている。78は石製品・茶臼である。下臼の受け皿部分で、内面は研磨され、外面は鑿状工具で加工されており、縦方向に筋状の加工痕が観察される。91・92は銭貨である。91は元豊通寶、92は紹聖元寶と思われる。



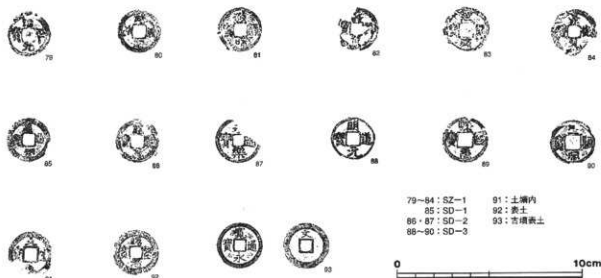
第29図 弥生時代以降出土遺物実測図一1 (1/3)



第30図 弥生時代以降出土遺物実測図-2 (1/3)



第31図 弥生時代以降出土遺物実測図一3 (1/3)



第32図 弥生時代以降出土遺物実測図-4 (1/2)

第3表 弥生時代以降出土遺物観察表

遺物 NO.	遺構	器種・分類	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	調整	備考	時期
29-1	SB-7-P7	II台付甕	(3.1)	10.8		密	良好	淡褐色	内外面摩滅		弥生後期
2	SD-1	S甕				密	良好	淡灰色	内面同心円文、外面タタキメ		古墳
3	SD-1	K碗	16.0	(4.1)		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ		10c~11c
4	SD-1	P小皿			4.1	密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、底部未切り		13c
5	SD-1	P盃	9.9 (23.8)	9.0		密	良好	淡灰褐色	内面回転ナデ、底ナデ、外縁部ナデ、底ナデ		13c
6	SD-1	T急須	8.4 (10.1)			密	良好	淡灰褐色	内面回転ナデ、底ナデ、外縁部ナデ、底ナデ		19c
7	SD-1	T土器	8.5.6 8.1.1 8.4.4			密	良好	淡褐色	型取り		近世
8	SD-1	N瓦				密	良好	淡灰色	内面ナデ、底ナデ、外縁部ナデ		近世
9	SD-1	N瓦				密	良好	淡灰色	内面ナデ、底ナデ、外縁部ナデ		近世
30-10	SD-2	S甕				密	良好	暗灰色	内面板ナデ、外面タタキメ		古墳~古代
11	SD-2	T碗	10.4	2.1		密	良好	灰色	内面ナデ、外縁部ナデ、底ナデ、外縁部ナデ		19c
12	SD-2	T盃	9.6	2.3	4.1	密	良好	黒褐色	内面ナデ、底ナデ、外縁部ナデ、底ナデ		17c
13	SD-2	T鉢	34.0	(3.9)		密	良好	茶色	内外面回転ナデ、鉄軸		19c
14	SD-2	T盃	13.6	(9.5)		密	良好	橙褐色	内面ナデ、外縁部ナデ、底ナデ、外縁部ナデ		近世
15	SD-2	H鍋				密	良好	茶褐色	内面ナデ、外縁部ナデ、底ナデ、外縁部ナデ		近世
16	SD-3	P碗				密	良好	淡灰褐色	内外面回転ナデ		13~14c
17	SD-3	K盃				密	良好	灰褐色	内面ナデ、外縁部ナデ、底ナデ、外縁部ナデ		10~11c
18	SD-6	P碗				密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ		13c
19	SD-6	P碗	(1.9)	7.6		密	良好	淡灰色	内面回転ナデ、底ナデ		13c前
20	SD-7	P碗	(1.9)	7.8		密	良好	淡灰色	内面回転ナデ、外縁部ナデ、底ナデ、外縁部ナデ		13c後
21	SD-7	P鉢				密	良好	淡灰色	内面ナデ、外縁部ナデ、底ナデ、外縁部ナデ		12c後
22	SD-7	T碗	6.2	5.2	3.0	密	良好	淡白褐色	内面回転ナデ、底ナデ、外縁部ナデ、底ナデ		19c前
23	SD-7	T皿	9.0	(1.9)		密	良好	乳白色	内面回転ナデ、底ナデ	志野	近世
24	SD-7	T甕				密	良好	茶褐色	内外面回転ナデ、内面スス付着		近世
25	SD-8	T皿	11.4	(2.5)	7.2	密	良好	淡灰褐色	内面回転ナデ、底ナデ、外縁部ナデ、底ナデ		16c前
26	SD-9	T碗	(2.2)	6.8		密	良好	淡灰色	内面回転ナデ、底ナデ、外縁部ナデ、底ナデ		19c後
27	SD-11	P碗	(2.5)	7.4		密	良好	淡灰色	内面回転ナデ、底ナデ、外縁部ナデ、底ナデ		13c後
28	SD-11	T碗	9.2	5.8	5.2	密	良好	淡白褐色	内面回転ナデ、底ナデ、外縁部ナデ、底ナデ		18c
29	SD-11	T碗	10.8	(4.7)		密	良好	淡灰褐色	内外面回転ナデ、底ナデ、外縁部ナデ、底ナデ		19c
30	SD-11	T碗鉢	29.6	(6.3)		密	良好	淡褐色	内面回転ナデ、底ナデ、外縁部ナデ、底ナデ		18c後
31	SD-11	H内耳鍋	25.2	(5.3)		密	良好	橙褐色	内面ナデ、外縁部ナデ、底ナデ、外縁部ナデ		18c
32	SX-2	P碗	(2.0)	7.2		密	良好	淡灰色	内面回転ナデ、底ナデ、外縁部ナデ、底ナデ		12c中
33	SZ-1	H小皿	12.4	(2.5)	7.0	密	良好	淡褐色	内面ナデ、外縁部ナデ、底ナデ、外縁部ナデ		中世
34	SZ-1	H小皿	12.5	2.3		密	良好	淡褐色	内面ナデ、外縁部ナデ、底ナデ、外縁部ナデ		中世
35	SZ-1	H小皿	12.8	2.0		密	良好	淡橙褐色	内面ナデ、外縁部ナデ、底ナデ、外縁部ナデ		中世
36	SZ-2	H甕				密	良好	淡褐色	内外面摩滅		古代
37	SK-58	H皿	9.8	(2.4)		密	良好	淡橙褐色	内面ナデ、外面ナデ、指押さへ		中世
38	SK-59	P碗				密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ		13c
39	SK-60	P碗				密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ		12c~13c

遺物 NO.	遺構	器種・分類	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	調整	備考	時期
40		S K-61 P 碗			(1.9) 8.0	密	良好	淡灰色	焼締ナゲ、焼締ナゲ		12c前
41		S K-63 K 碗				密	良好	淡灰色	内外面回転ナゲ		10c~11c
42		S K-63 T 仏飯器	6.4	4.4	3.8	密	良好	淡褐色	焼締ナゲ、焼締ナゲ		18c
43		S K-64 H 甕				竹髓	良好	淡褐色	内面摩滅、外面ハケメ		古墳~古代
44		S K-65 P 小皿				密	良好	淡灰色	内外面回転ナゲ		12c中
45		S K-66 H 碗		(1.4)	5.6	密	良好	淡褐色	焼締ナゲ、焼締ナゲ		中世
46		S K-67 K 碗				密	良好	淡灰色	内外面回転ナゲ、輪花		11c~12c
47		S K-67 K 碗				密	良好	淡灰色	内外面回転ナゲ		11c~12c
48		S K-69 P 碗		(1.7)	6.9	密	良好	淡灰色	焼締ナゲ、焼締ナゲ、焼締ナゲ		12c中
49		S K-70 P 碗				密	良好	淡灰色	内外面回転ナゲ		13c中
50		S K-71 P 碗				密	良好	淡灰色	内外面回転ナゲ		12c
31-51		S K-72 P 碗	13.2	(3.7)		密	良好	淡灰色	内外面回転ナゲ		13c後
52		S K-75 H 小皿	7.0	(2.2)		密	良好	淡褐色	焼締ナゲ、焼締ナゲ、焼締ナゲ、焼締ナゲ		中世
53		S K-76 H 小皿	10.4	(2.0)		密	良好	淡褐色	焼締ナゲ、焼締ナゲ、焼締ナゲ		中世
54		S K-77 H 小皿	9.2	(1.9)		密	良好	淡褐色	焼締ナゲ、焼締ナゲ、焼締ナゲ		中世
55		S K-78 T 鉢	27.8	(4.4)		密	良好	淡灰色	焼締ナゲ、焼締ナゲ、焼締ナゲ		17c中
56		表土 S 壺		(4.4)		密	良好	淡灰色	内外面回転ナゲ、外面沈痕		古墳
57		表土 S 壺				密	良好	暗褐色	内面板ナゲ		古墳
58		表土 K 皿		(2.7)	7.8	密	良好	淡灰色	焼締ナゲ、焼締ナゲ、焼締ナゲ、焼締ナゲ		10c中
59		表土 P 碗	15.9	5.4	7.4	密	良好	灰色	焼締ナゲ、焼締ナゲ、焼締ナゲ、焼締ナゲ		13c前
60		表土 P 碗	14.0	(4.3)		密	良好	淡灰色	焼締ナゲ、焼締ナゲ		13c中
61		表土 P 碗				密	良好	暗灰色	内外面回転ナゲ		12c中
62		表土 P 碗		(2.5)	7.2	密	良好	淡褐色	焼締ナゲ、焼締ナゲ		12c中
63		表土 P 碗		(2.1)	6.8	密	良好	灰色	焼締ナゲ、焼締ナゲ、焼締ナゲ		12c中
64		表土 P 碗		(2.4)	7.8	密	良好	灰色	焼締ナゲ、焼締ナゲ、焼締ナゲ		13c前
65		表土 P 碗		(2.1)	6.2	密	良好	灰色	内外面回転ナゲ		12c中
66		表土 T 皿鉢				密	良好	淡灰色	内外面回転ナゲ、鉄軸		近世
67		表土 T 片口鉢	19.2	(8.0)		密	良好	淡褐色	内外面回転ナゲ、鉄軸		18c後
68		表土 T 鉢	18.2	(8.3)		密	良好	淡褐色	焼締ナゲ、焼締ナゲ、焼締ナゲ		18c~19c
69		表土 T 窪口	4.3	2.2	3.9	密	良好	淡灰色	焼締ナゲ、焼締ナゲ、焼締ナゲ、焼締ナゲ		近世
70		表土 T 壺	12.2	(24.9)		密	良好	暗灰色	焼締ナゲ、焼締ナゲ、焼締ナゲ、焼締ナゲ		近世
71		表土 T オサ		(4.2)		竹髓	良好	赤褐色	内外面ナゲ、底面布目痕		近世
72		表土 H 釜	13.0	(3.6)		密	良好	淡褐色	内外面板ナゲ		近世
73		表土 H 鍋	19.8	(1.9)		竹髓	良好	淡褐色	内面板ナゲ、外面ナゲ		14c
74		表土 H 内耳鍋	23.2	(4.2)		竹髓	良好	橙褐色	焼締ナゲ、焼締ナゲ、焼締ナゲ		18c
75		表土 H 焙烙鍋	27.2	(2.1)		密	良好	赤褐色	内面ナゲ、外面板ナゲ・浮文		19c
76		表土 N 蓋	16.2	(3.4)		密	良好	黒灰色	上面ナゲ、内面回転ナゲ		近世
77		表土 N 軒平瓦				密	良好	暗灰色	外面ナゲ		近世
78		表土 R 石臼	40.4	(3.3)					内面研磨、外面打ち欠き		近世
32-79		S Z-1 I 銭貨									初跡：998
80		S Z-1 I 銭貨									初跡：1068
81		S Z-1 I 銭貨									初跡：1111
82		S Z-1 I 銭貨									不明
83		S Z-1 I 銭貨									不明
84		S Z-1 I 銭貨									不明
85		S D-1 I 銭貨									不明
86		S D-2 I 銭貨									不明
87		S D-2 I 銭貨									初跡：1408
88		S D-3 I 銭貨									初跡：1032
89		S D-3 I 銭貨									不明
90		S D-3 I 銭貨									初跡：1038
91		土境内 I 銭貨									初跡：1078
92		表土 I 銭貨									初跡：1094

* Y-弥生土器 S-須恵器 K-灰輪陶器 P-灰輪系陶器 T-陶器 Z-磁器 H-土師器 R-石製品

注量の単位はcm、()は推定数値。底径には、脚部径や台部径を含む。